

新潟県村上市上野遺跡の調査研究報告（1）

— 第7次・第8次調査の所見について —

加藤 学・加藤 元康

1 はじめに

上野遺跡は、新潟県北部の村上市朝日地区に所在し、国道7号朝日温海道路の建設に伴い、2017年度から本発掘調査を行っている。第1次（2017年度）から第3次調査（2019年度）では土砂流堆積物が堆積する範囲、第4次調査以降は遺構・遺物が集中する集落域を中心調査している。第4次（2020年度）から第8次（2024年度）調査により縄文時代後期前葉の大規模な集落であることが明らかになっている。

ここで報告する第7次（2023年度）・第8次（2024年度）調査は調査区域の北側にあたり（第1図）、上野遺跡の集落の中心部分である。こ

れまでに縄文時代後期の遺物が出土する土砂流を検出した第1次調査の報告書を刊行しているが〔公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2019〕、それ以後の調査についてはまとまった調査報告はしていない。また、本遺跡の焼人骨集積土坑SK439については第4次（2020年度）調査で検出し、第6次（2022年度）調査で遺構を地山ごと切り取り、新潟医療福祉大学に搬入して室内調査を進めた。その後、2023年に調査概要を報告し〔平・奈良・加藤・石川 2023〕、縄文時代の葬制を知る上で重要な遺構として全国的に注目してきた。

第7次・第8次調査では焼人骨集積土坑SK439を含めた集落域を解明する多くの調査成果を得られ、第28回遺跡発掘調査報告会のシンポジウムで報告した〔新潟県埋蔵文化財センター 2025〕。ここでは、遺跡の重要性を鑑み、現段階における所見を報告する。なお、発掘調査及び整理作業は継続中であり、発掘調査報告書刊行時までの間に所見が変更になる可能性があることを断っておく。

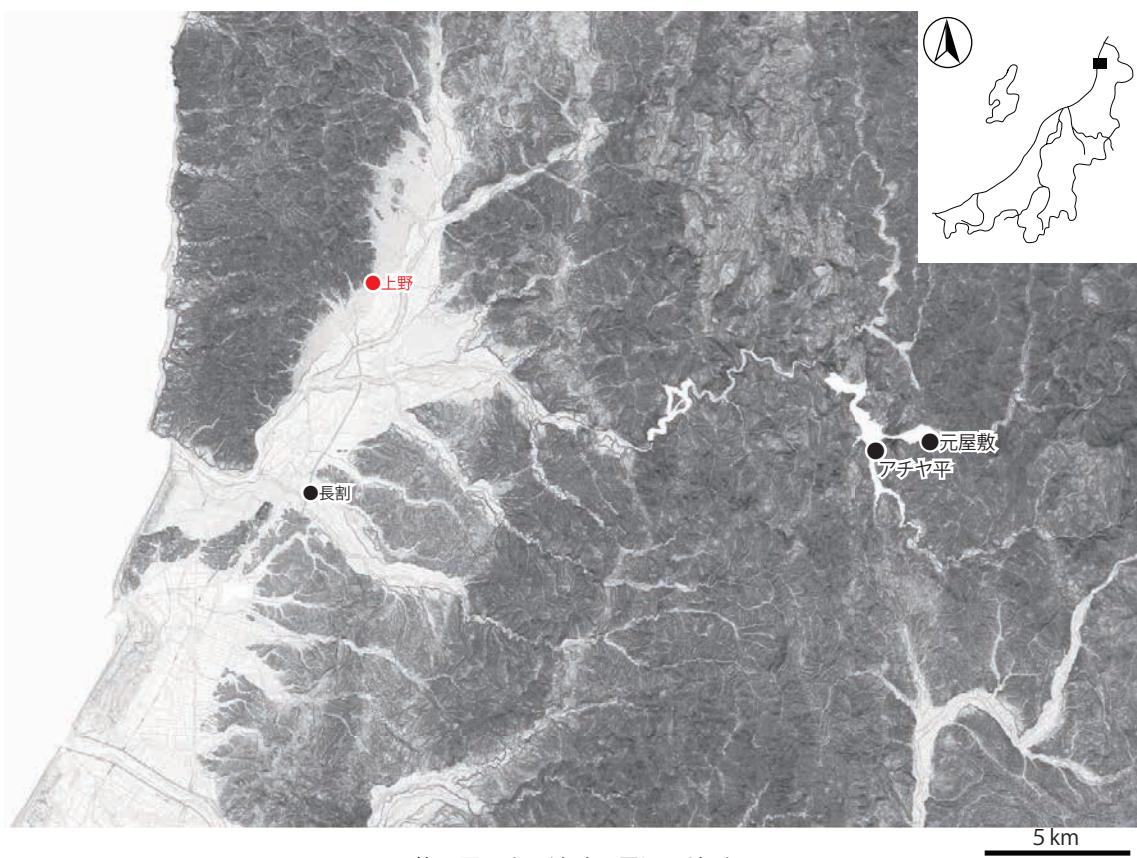
2 上野遺跡の概要

1) 遺跡の立地環境

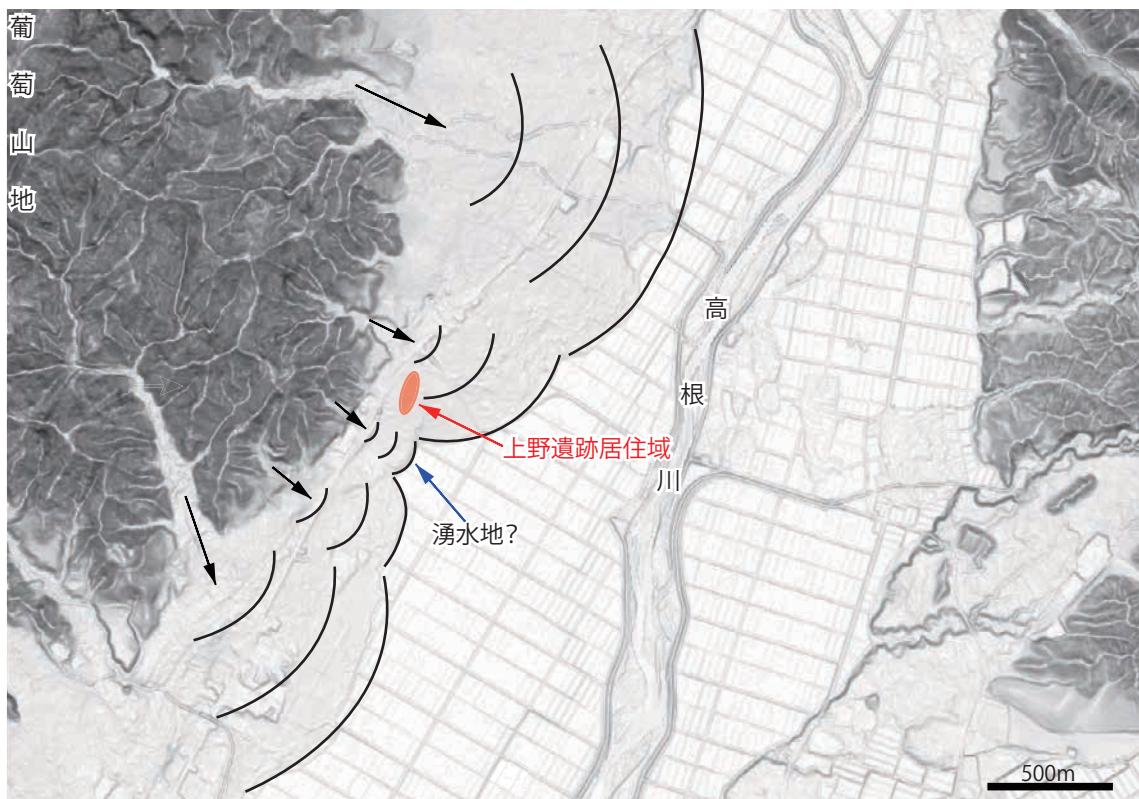
上野遺跡は、村上市猿沢・檜原に所在する（第2図）。三面川の支流・高根川右岸の扇状地に立地しており、標高は35～39mほどである。高根川の周囲に広がる氾濫原より一段高く、東側には谷底平野を眺望できる。遺跡の西側には岩船花崗岩類からなる葡萄山地が広がり〔新潟県農地部 1991〕、三額山（587m）・虚空藏山（466m）がある。傾斜30度以上の急斜面地の表層には真砂土（風化花崗岩）が堆積しているため、雨量が多くなると沢筋に土砂流が発生する。これが遺跡周辺の扇状地を形成しており、発掘調査でも真砂土が流れ下った流路跡を検出している。遺跡周辺が、災害のリスクを抱えた土地にあたることは明らかで



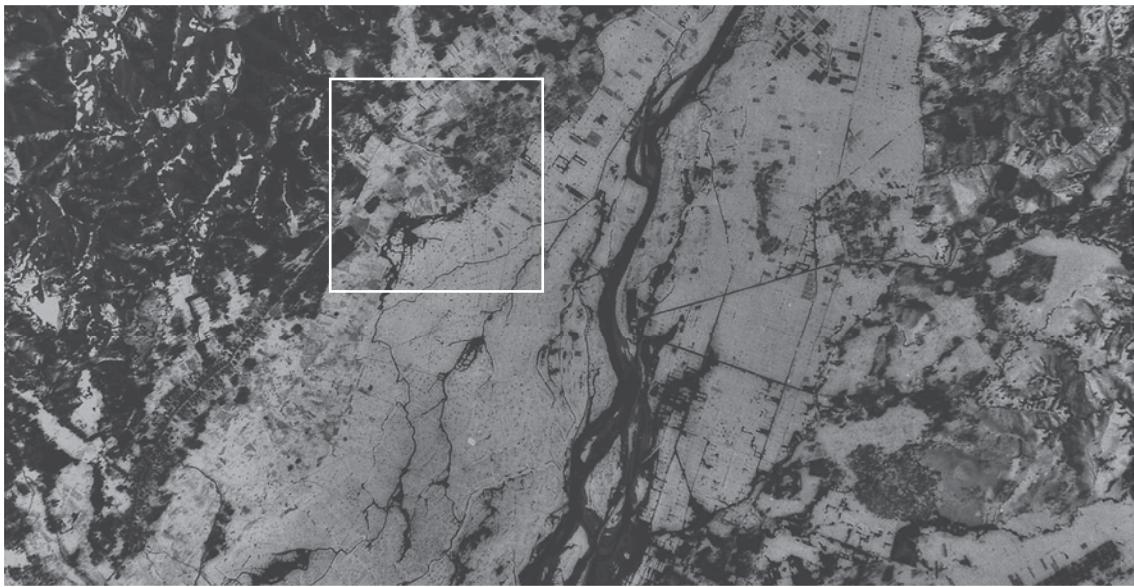
第1図 第8次調査の遺跡遠景(西から)



第2図 上野遺跡と周辺の地形
(国土地理院傾斜量図に加筆)



第3図 上野遺跡周辺の扇状地の形成と居住域の範囲
(国土地理院傾斜量図に加筆)



第4図 土地整備前の遺跡周辺の状況
(出典:国土地理院。空中写真(昭和22年撮影)を拡大し白枠を加筆。枠内が遺跡周辺)

ある。遺跡は延長 370 mにも及ぶ広範囲に存在するが、建物が築かれた居住域は 100 mほどの間に限定される。ここは土砂流の沢筋を回避した場所にあたり（第3図）、災害リスクを考慮して居住域が設けられたとみられる。

遺跡周辺の資源環境を確認する。1947 年 4 月 12 日撮影の航空写真「塩野町」には、扇端部付近から流れ出る流路が認められる（第4図）。扇端部に伏流水の湧水地点が存在した可能性があり、水を得ることにおいても有利な立地条件にあったことがうかがえる。また、調査対象地の南東側の扇端部では川原石からなる礫層を検出しており、その直上から後期前葉の土器が出土している。このことは、遺跡が形成されたころに高根川が遺跡付近に流れていたことを示している。高根川では食糧資源のほか、珪質頁岩・鉄石英・メノウなどの石器石材を採取でき、遺跡は恵まれた石材環境にあったと考えられる。また、葡萄山地西側の海岸との間には古道が横断しており、内陸側に塩や海産物が運搬されたといわれる〔富樫 2018〕。高根川を介した内水面交通も含めると、周辺地域とのアクセスにおいても良好な場所にあるといえよう。

また、本遺跡から 20km圏内には、元屋敷遺跡・アチヤ平遺跡等からなる奥三面遺跡群や長割遺跡など、縄文時代後期の大規模遺跡が存在する（第2図）。村上市朝日地区は、県内有数の縄文遺跡が所在するが、特に後期の遺跡が多く、中でも上野遺跡は代表的な遺跡のひとつといえる。

2) 調査の概要

上野遺跡は、平面積 22,135m²を対象に 2017 年から 8 年間、本発掘調査を実施してきた。縄文時代後期を中心とする遺構を重層的に検出し、調査面積は複数層の累計で 48,628m²になる。これまでに約 12,000 基の遺構を検出し、約 4,800 箱（箱の内寸 54 × 30 × 10cm）の遺物が出土しているが、その大半が後期前葉に帰属する。縄文時代後期前葉の遺構・遺物としては、県内最多の数量といえる。

① 遺跡の層序

遺跡の地層は、葡萄山地に由来する真砂土から形成され、土壌化している黒色の層位と土壌化していない黄褐色の層位が交互に堆積する。遺物を含む層位を、上からⅢa層・Ⅲb層・Ⅲc層・Ⅲd層（第5図）に区分しており、土壌化しているⅢb層・Ⅲd層と、土壌化していないⅢa層・Ⅲc層が互層をなす。大半

の遺物はⅢa層下部～Ⅲb層から出土しており、Ⅲb層をプライマリーな遺物包含層と考えている。Ⅲb層から出土した遺物は、後期前葉（三十稻場式土器新段階～南三十稻場2式土器段階）のものが大半で、後期中葉のものをわずかに含む。遺構検出面は、主にⅢa層下面、Ⅲb層中、Ⅲb層下面に区分でき、明確な遺構の大半はこの面で検出した。

② 検出遺構

検出した遺構の大半は建物の柱穴である。柱穴同士の関係を検討しながら調査した結果、第8次調査終了時点まで249棟の多様な建物（平地建物210棟・掘立柱建物29棟・竪穴建物8棟・敷石建物2棟）を把握している。足の踏み場がないほど密集して検出した柱穴（第6図）は、一時期に存在したのではなく、同じ範囲に建物が繰り返し建てられた結果と考えられる。集落の実態に迫るため、同時期に建てられた建物の組み合わせを検討することが必要である。

越後における後期初頭～前葉には、竪穴建物がほとんどないにもかかわらず、膨大な数の柱穴を検出する〔品田1999〕。本遺跡もこのような状況にあり、同じ範囲から多数の炉を検出し、柱穴の多くは建物に伴うものと考えられた。しかし、竪穴建物のように建物範囲を把握することが難しい状況にあるため、品田高志〔1999〕の復元事例や竪穴建物の柱の配置を参考に、現地で柱穴の組み合わせを検討しながら調



第5図 基本層序



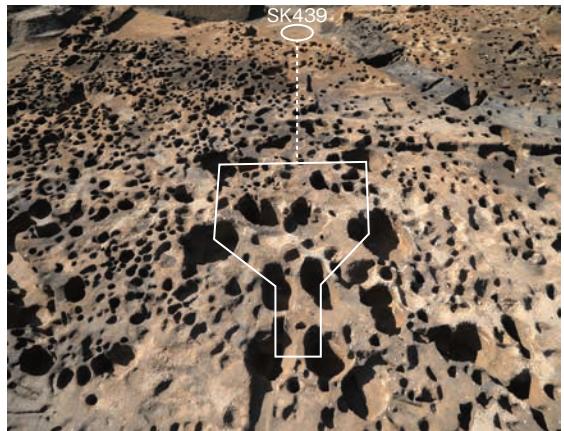
第6図 第8次調査の完掘状況



第7図 平地建物



第8図 凸字形の大型掘立柱建物



第9図 大型掘立柱建物の柱穴配置と焼人骨集積土坑

査を進めた。検討に当たっては、炉を中心に同心円を描き、柱穴の規模や埋土の内容、遺構の切り合い関係を整理し、柱穴の組み合わせを見出した。その結果、検出した炉を中心に一定の距離を保ち、多角形や円形の柱穴配置が認められるものを平地建物と判断した（第7図）。このように復元した建物は、直径4～6mほどの規模であった。

平地建物の柱穴に比して、明らかに大型で深い柱穴が存在し、掘立柱建物の柱穴と考えられた。亀甲形をなすものの、4本柱からなる長方形をなすものが主体で、8基の柱穴が「凸」字形に配列された大型掘立柱建物が注目される（第8図）。4本の柱を長方形に配置し、柱の中軸に沿って片側に直交する4基の柱穴を配置する珍しい形状をなしており、長軸88m、短軸6.5mと大型である。柱穴も大型で、大きなもので直径2m、深さ1.5mである。柱痕の直径は25～40cmほどで、柱あたりを含めてひとつの柱穴から最大で6か所の柱の痕跡を確認しており、同じ場所で同じ形式の建物を6回程度建て替えたと考えられる。大型の柱穴は、建て替えの繰り返しによって形成されたといえる。大型掘立柱建物は、馬の背状の微高地頂部に立地し、かつ集落の中央に位置する。加えて建物の中軸線上に焼人骨集積土坑があることを踏まえると、記念物的な象徴性を有する特殊な建物であったと考えられる（第9図）。

なお、平地建物や掘立柱建物の柱穴は一定の範囲で2～3棟が重複しており、同じ場所で数回の建て直しが行われたと想定できる。また、建物を構成する遺構の切り合い関係から、堅穴建物→掘立柱建物→平地建物と概ね変遷することが明らかになったが、劇的な変化ではなく、各形態の建物が併存した時期もあったとみられる。

本遺跡では建物以外の土坑墓や貯蔵穴などが、ほとんど見つかっていないことも特徴的である。遺跡の規模からすると極めて少ない状況にあるなかで、焼人骨集積土坑SK439は特異な存在といえる。焼人骨が出土した遺構は、ほかにも見つかっているが、SK439より焼人骨の数量は少ない。このほかに墓の可能性がある遺構として、完形の注口土器や水晶の原石が出土した土坑がある。断面が袋状を呈する土坑も含まれており、貯蔵穴が墓に転用された可能性がある。いずれにしても、建物数に比して墓の数は少なく、上野遺跡の葬墓制の詳細は把握できていない。

③ 自然流路 SR103 の埋没過程

居住域を横断するように検出したSR103は、常に水が流れていた訳ではなく、増水した時に水が流れ込んだと推定する流路である。この調査を進めた結果、集落形成の一端を把握できる重要な情報を得ることができた。

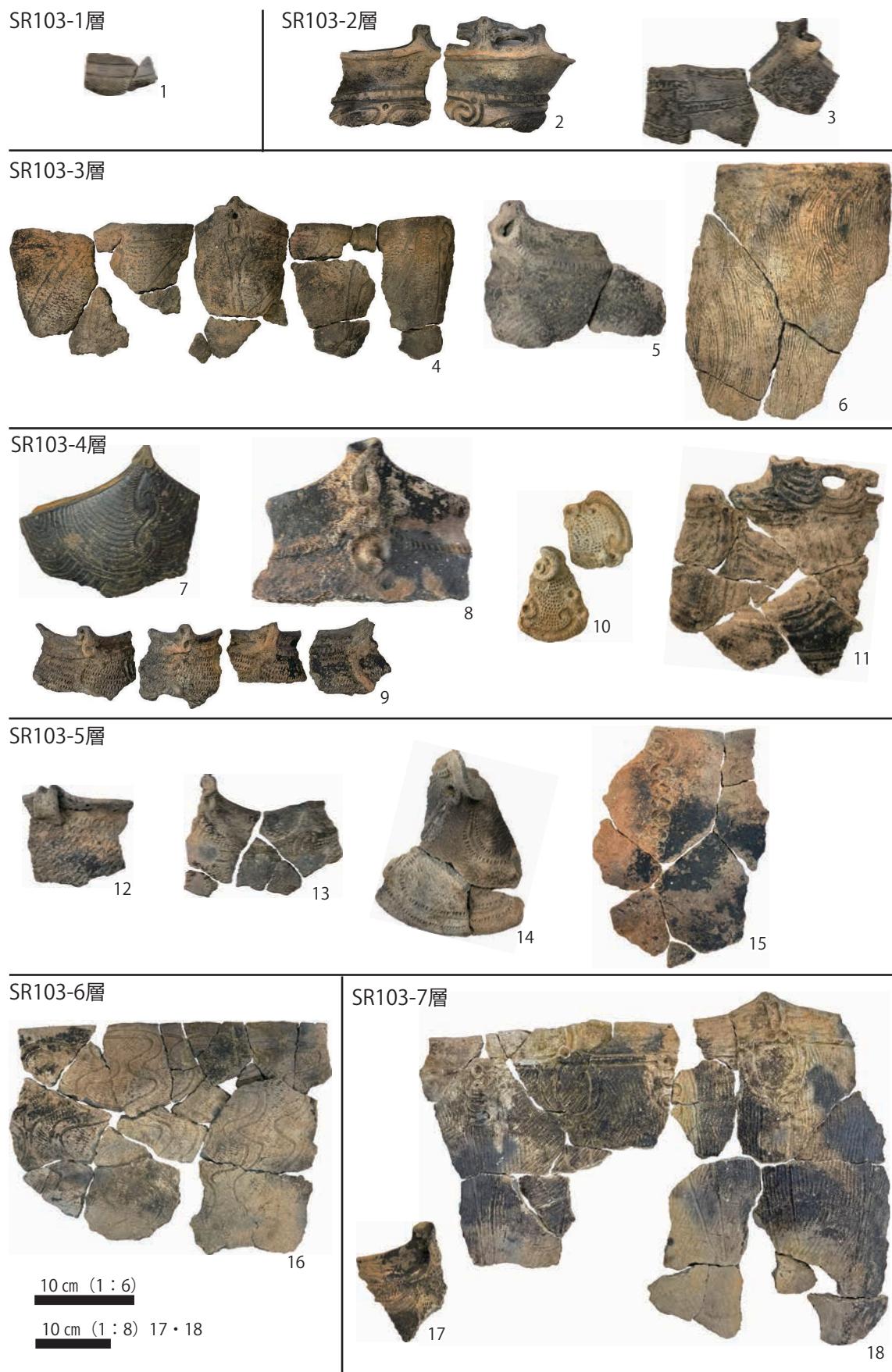
埋土には多量の遺物を含み、廃棄場として埋め立てられたと考えられる（第10図・第11図）。埋土は



第10図 SR103セクション



第11図 SR103遺物出土状況



第12図 SR103における各層位の出土土器

7層に区分できるが、各層の間に粗粒砂が挟在することから、埋没過程で水が流れ込むことがあったことがうかがえる。この粗粒砂を廃棄単位を示す指標と捉えて、遺物を層位的に取り上げた（第12図）。

最下層の7層では、綱取I式と三十稻場式新段階の土器が出土した。本遺跡で最も古く位置づけられる遺物であり、集落の開始期を示すとみられる。6層は土砂流堆積物である。遺存状態が良好な土器も含まれるが、二次堆積物が中心である。7層は6層に覆われており、6層より上位の堆積物との間に時間差を有することは確実である。3・4・5層は、廃棄場としての埋め立てが行われた層位である。いずれの層位からも、三十稻場式新段階の土器が出土しており、この段階でほぼ遺構は埋め立てられたと考えられる。2層からは南三十稻場式土器、1層からは加曾利B式土器が出土しているが、これらは埋め立て後、陥没した部分に堆積した層位と想定している。

以上の所見から、集落の開始期は三十稻場式土器新段階で、SR103の埋め立ては三十稻場式土器新段階の時期に行われたことが明らかになった。埋め立てられたことで流路跡を横断する広い平地を確保でき、南三十稻場式土器段階以降は広範囲に建物が分布するようになったと考えられる。

④ 出土遺物

整理箱4,800箱以上もの膨大な遺物の大半は、土器・石器である。

土器は、縄文時代後期前葉の三十稻場式土器新段階～南三十稻場式土器段階の土器が多量に出土した。これに続く中葉の加曾利B式土器段階もわずかに出土するが、遺跡の中心時期は後期前葉である。なかでも、上述の自然流路SR103における層位的出土事例（第12図）は、後期前葉の土器の変遷を知る上で重要な資料と考えられる。また、遺跡全体では在地系土器のほか、東北・関東・信州などの特徴をもつ土器も認められ、広域の交流を窺い知ることができる。

石器は、石鏃・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧・石錘・石皿・磨石・凹石などが出土し、礫石器（石皿・磨石・凹石）が多いことが特徴である。また、近隣の奥三面遺跡群では輝緑岩製の磨製石斧が量産されているが、本遺跡の出土量はそれと比べると少なく、どちらかといえば自家消費的な保有数に収まる程度と考えられる。また、上野遺跡で用いられている石器石材の大半は高根川で採取可能であり、豊かな資源環境の下で盛んに製作されたと考えられる。石鏃などに用いられた黒曜石や小型磨製石斧に用いられた蛇紋岩などは、明らかな搬入石材であるが、その利用率は高くない。

このほか、土偶・垂飾・土錘などの土製品、石棒・垂飾・線刻礫などの石製品が出土しているが数少なく、特徴的な出土状況は示していない。

3) 建物の変遷

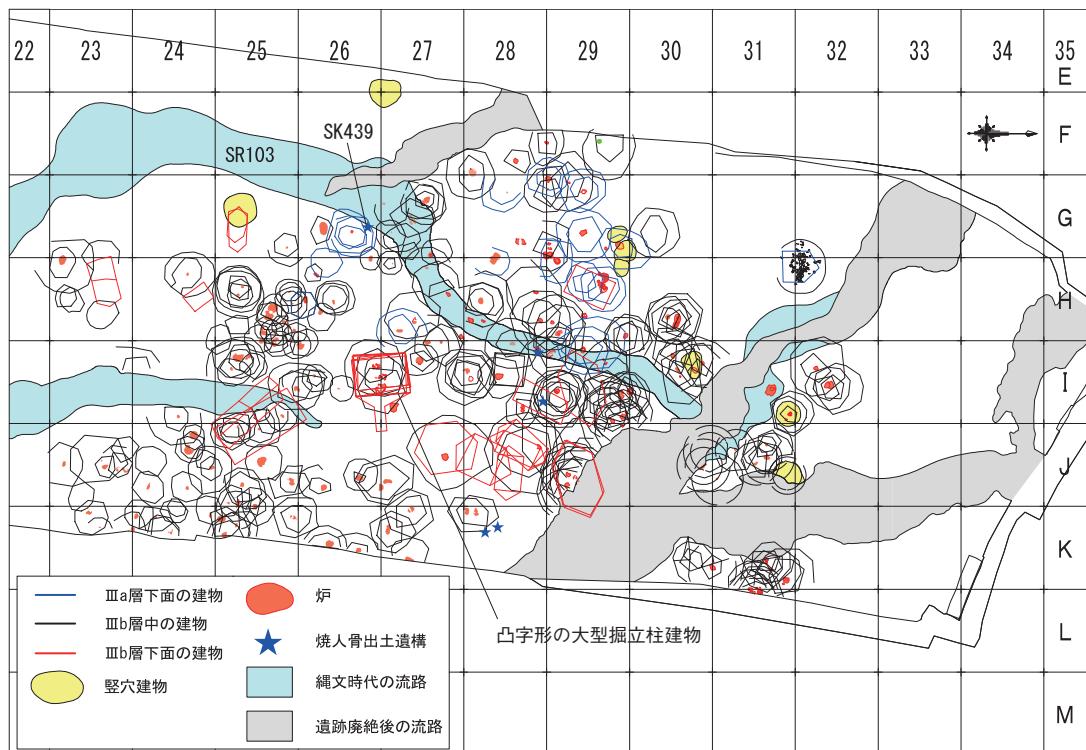
建物の変遷については、建物間の年代関係など、基礎的な分析を行っているところである。多くの建物が平地建物で、遺構一括資料を把握しにくいが、分析が進んでいる第7次・第8次調査の状況から考えられる集落の遷り変わりを示しておきたい（第13図・第14図）。

最も古い段階に位置づけられるⅢb層下面では、竪穴建物・掘立柱建物・平地建物が存在する。このうち竪穴建物は三十稻場式土器新段階に築かれており、本遺跡の最も古い段階に位置づけられる。建物が点在する状況にあり、複数が集中的に分布する状況はない。また、集落の開始期には居住域を自然流路SR103が横断し、三十稻場式土器新段階の間に廃棄域として埋め立てが行われている。

SR103の埋め立てによって、より広い平場が形成され、南三十稻場1式土器段階の頃には掘立柱建物や平地建物が出現する。掘立柱建物の形態は凸字形、六角形、細長い亀甲形、長方形などバラエティーに富むが各形態の棟数は少ない。掘立柱建物は、弧状に分布するように見えるが、建物間の同時性については

検討が必要である。集落の中央に築かれた凸字形の大型掘立柱建物は、中核的な建物と考えられ、中央を通る線上には焼人骨集積土坑SK439が位置する。大型掘立柱建物・SK439とともに、埋土から南三十稻場1式の土器片が出土しており、検出層位も同じであることから、現状においては有意な関係にあると想定している（第9図）。

Ⅲb層中では、平地建物が主体となって建物数が最も多い。前後の時期と比べて継続期間が長いことによると考えられるが、より広範囲に集落が展開している。建物の配列は、弧状・C字状・環状を呈するよ



第13図 建物の配置

0 10m
(S=1/800)

時期	土器型式	集落の通り変わり	建物の通り変わり						遺構検出面	
			建物形式	縫穴建物	掘立柱建物	大型掘立柱建物	平地建物	敷石建物	流路の埋め立て	
縄文時代後期	前葉	三十稻場式土器新段階	集落のはじまり 流路の埋め立てが行われる。	縫穴建物主体						Ⅲb層下面
		南三十稻場1式土器段階	流路の埋め立てが完了。 広い平地がつくられる。		掘立柱建物主体					Ⅲb層中
		南三十稻場2式土器段階	集落の最盛期			平地建物主体				Ⅲa層下面
	中葉	加曾利B式土器段階	集落のおわり 小規模な活動	発見されず						

第14図 上野遺跡の建物変遷図

うにもみえるが重帶構造は認められず、中期の環状集落とは異質である。建物が著しく重複する範囲は、建物の配列が重なっている可能性がある。

最上位のⅢa層下面は、遺構埋土にⅢa層を含み、南三十稻場1・2式土器段階に位置づけられる建物が展開する。平地建物の中には、密に設けられた壁柱穴がめぐる形式が出現するほか、敷石建物もある。建物数は少なく、この段階で集落は終焉を迎えたと考えている。なお、本遺跡からは加曽利B式土器も少數出土しているが、明らかにこの段階に位置づけられる建物は発見されておらず、小規模な活動によるものと捉えている。

Ⅲa層下面の遺構を覆うⅢa層は、土砂流や洪水に由来するものである。加曽利B式土器段階以降に発生した扇状地を形成する自然の営為を契機に、上野遺跡から縄文人が離れたとみられる。

3 焼人骨集積土坑 SK439 の調査

1) 調査の経過

焼人骨集積土坑SK439を検出したのは、2020年10月20日（第4次調査）であり、焼骨が散在する状況を確認した。この段階では焼骨が人骨であるか判断できなかったが、焼骨を伴う遺構が楕円形であること、大型礫が伴い、墓標である可能性が想定されたことから、翌21日には墓壙であると判断した。22日には、調査の進展により、下位ほど焼骨が大きく密集する状況を確認し、同日、現地を確認した筆者の一人・加藤学（当時、新潟県教育庁文化行政課）は、人骨の可能性が高いので、新潟医療福祉大学の奈良貴史氏に現地指導を受けるよう助言した。これを受け、26日に奈良氏が現地を確認し、焼骨はすべて人骨であること、高温で焼かれたことが明らかになった。11月3日には、現地説明会においてSK439の調査状況を写真で一般に公開した。当初、現地調査で焼骨を取り上げることを試みたが、焼骨の数量が多いこと、水分を含んだ状態の焼骨は脆弱であることから作業が困難を極めたことから、12月9日に調査方法の検討会を開催し、遺構を地山ごと切り取って室内で調査することとした。その後、ビニールや川砂で養生し、現地で越冬させた。

遺構を地山ごと切り取るには、その周囲の調査を完了させる必要があった。SK439周辺は、遺構が密集する範囲であるため調査が難航し、切り取り作業は2022年9月26日～10月1日に実施した。切り取り後は、新潟医療福祉大学に設置した整理用プレハブに搬入し、本格的な調査を開始した。なお、発見後約2年を経過していたが、遺存状態は良好であった。

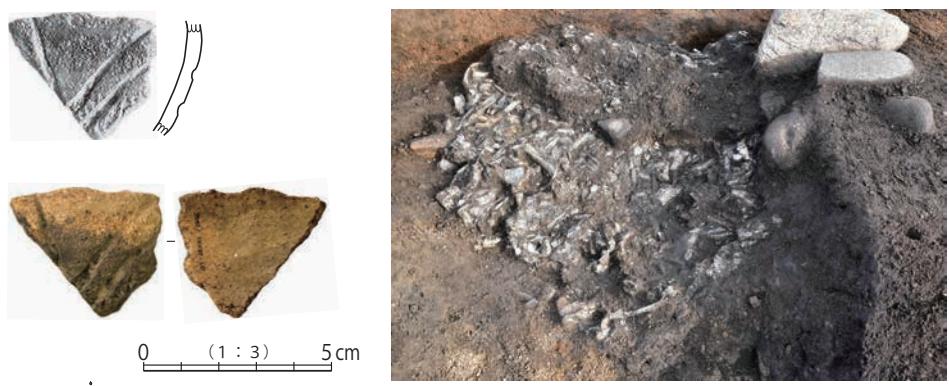
新潟医療福祉大学では、焼人骨に整理番号を付し、部位を同定しながら1点ずつ取り上げを行い、2024年12月までに焼人骨の取り上げを完了した。また、焼人骨の取り上げとともに適宜、写真撮影、オルソ画像の作成を行いながら調査を進めた。焼人骨の取り上げ後には、遺構の掘り方の確認、新たに発見された遺構の調査などを行い、2025年3月にすべての記録作業を完了した。

なお、2022年9月10日（現地）・10月30日（新潟医療福祉大学）、2023年11月26日（新潟医療福祉大学）に調査状況を一般公開した。また、2023年6月18日には研究者向けの公開を行い、遺構の評価や調査方法について、多くのご教示をいただいた。

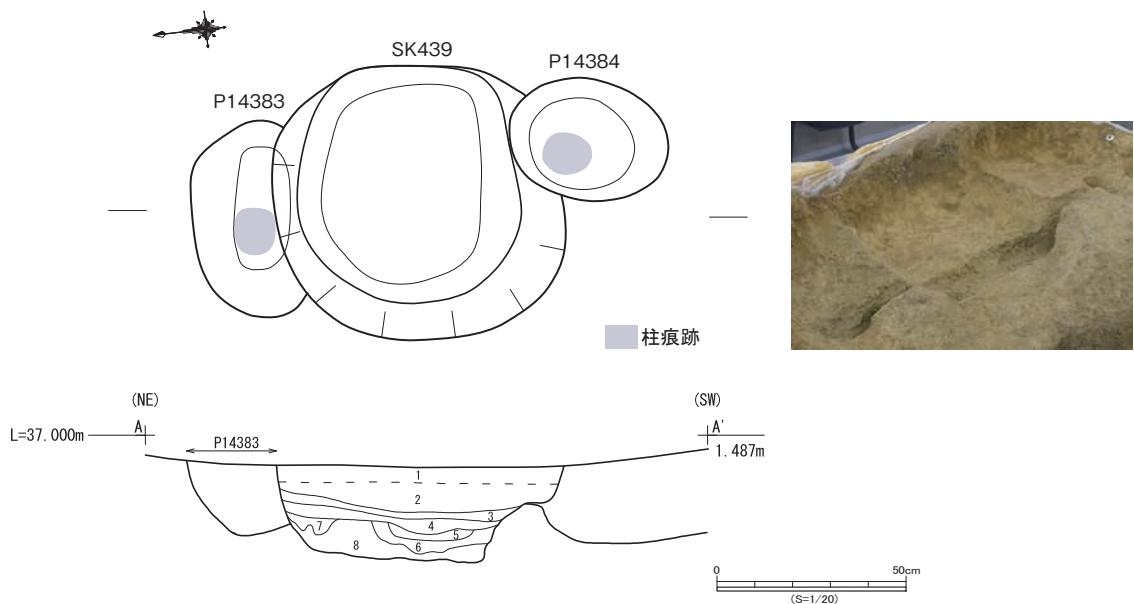
2) 考古学的所見

【検出面と時期】

遺構を検出した当時の担当者の所見によれば、SK439はⅢb層に覆われていたという。付近の基本層序と対比しても、その所見に矛盾はなく、検出面はⅢb層下面に位置づけられる可能性が考えられる。ま



第15図 SK439出土土器と出土状況



1. 10YR3/2黒褐色砂 微量の焼人骨片を含む。
2. 10YR3/2黒褐色砂 極めて多量の焼人骨片を含む。ここより下位に焼人骨が集中する。
3. 10YR3/2黒褐色砂 2層と同質のシルトを含むが、ほぼ焼人骨からなる。
四肢骨で外周を方形に区画。3層より下位に焼人骨の有意な配列が認められる。
4. 10YR4/2灰黄褐色砂 ほぼ焼人骨からなり、砂・シルトをほとんど含まない。四肢骨を東西方向に並列する。
5. 10YR3/2黒褐色砂(中粒砂) 烧人骨を極めて多量に含む。
南側テラス下で東西方向に広がる長方形区画内のみで認められる。
6. 10YR5/4にぶい黄褐色砂(細礫混じり粗粒砂) 烧人骨を多量に含む。φ15~20cmほどの地山ブロックをまばらに含む。
7. 10YR3/2黒褐色砂(極粗粒砂～細礫混じり中粒砂) 烧人骨の小片をごくわずかに含む。
8. 10YR5/4にぶい黄褐色砂(細礫混じり中粒砂) 比較的粒度が細かく均質な土質。焼人骨の細片・φ1~2mmの炭化物粒をごくわずかに含む。
掘り方部分を整地した痕跡か。

第16図 SK439の遺構平面図・断面図



第17図 焼人骨集積土坑 SK439の焼人骨出土状況
(左：第7次調査の状況、右：第8次調査の状況)

た、自然流路 SR103 縁辺の斜面際に位置し、SK439 は SR103 の埋め立て後、平地化された後に構築された可能性が高い。SR103 の埋め立ては三十稻場式土器新段階に完了しており、集落の変遷観を踏まえると、SK439 の年代を南三十稻場式土器段階に位置づけることができる。埋土の最上位を覆う 1 層中からは、南三十稻場 1 式段階の土器片が出土しており（第 15 図）、このころに形成された遺構と考えたい。なお、現在、焼人骨を試料とした年代測定等を行っている。

【形状】

SK439 は、検出した翌日に楕円形の掘り込みをもつ土坑と評価し、長径 150cm、短径 100cm の楕円形の掘り方をもつ土坑と報告してきたが、所見を大幅に修正することになった。調査の最終段階にさしかかった 2025 年 1 月に、遺構を固めた薬剤を除去し、切り取った遺構全体を再精査したところ、SK439 と複数の柱穴が重複することが明らかになった。また、現地調査時の記録を再整理し、断面の再精査を行った。その結果、楕円形と見ていたプランは、土杭と複数の柱穴の集合体であることが明らかになった。SK439 の規模は、長軸約 76cm、短軸約 74cm、検出面からの深さ約 26cm で、方形または多角形の平面形で有段の掘り込みをもつ土坑であることが確定した（第 16 図）。

周囲の遺構との切り合い関係は、SK439 が北側の P14383 を切り、南側の P14384 に切られることを確認した。したがって、遺構の構築順序は、P14383 → SK439 → P14384 となる。P14383・P14384 は、平地建物に伴う柱穴と考えられ、柱痕が認められた。平地建物が多く建てられた時期に SK439 を位置づけることができ、集落の変遷観と調和的に理解することができる。

なお、現地調査時に SK439 に伴うと考えられた大型の礫は、P14384 の埋土に含まれることが明らかになった。P14384 は、SK439 を切るように掘られており、焼人骨の配列の一部を乱している。このような状況から、P14384 の埋土には、焼人骨の小片が混在した。本遺跡においては、埋め土材として大型の礫を利用するが多く、SK439 に伴うと考えられた礫もそのひとつと判断した。

【出土遺物】

SK439 から出土した遺物は極めて少ないことが特徴である。埋土最上位の 1 層から、南三十稻場 1 式の土器片（焼人骨集中直上）、凹石が出土したが、二次的な混入である可能性がある。2～5 層では、ほぼ焼人骨しか出土していない。時期を特定できない土器の小破片や、礫片が少数出土し、これも二次的な混入とみている。少なくとも、副葬品と見られる遺物は認められず、焼人骨が集中的に出土した 2 層以深では、炭化物もほとんど出土していない。土坑に被熱面が認められないことも踏まえれば、遺体は他所で焼成され、収骨してから納められたと判断できる。

【土坑の形成過程】

埋土の堆積状況、焼人骨等の出土状況、周囲の遺構との切り合い関係の整理から、SK439 の形成過程を復元したい。

SK439 構築以前、西側にある自然流路 SR103 が埋め立てられ、それにより形成された緩斜面地に SK439 が構築された。周囲には柱穴が密集しており、SK439 の形成前後に平地建物が建てられたと考えられる。SK439 以前に P14383、以後に P14384 が掘削されている。すなわち、流路の埋め立て後、断続的に平地建物が建てられた間に位置づけることができる。

開口部で長軸約 76cm、短軸約 74cm、深さ約 26cm、遺構中位の有段部で長軸約 60cm、短軸約 56cm の掘り込みが掘られ、最下部には厚さ 10cm ほどの 8 層が堆積している。8 層は地山と区別が難しい土質であるが、焼骨の小片や炭化物粒をごくわずかに含み、地山と比べると粒子の細かな均質な土質である。この

堆積後に焼人骨の埋葬が始まっていることから、埋葬前に整地が行われた痕跡といえるかもしれない。

5・6層は、南側の長方形の範囲内でのみ認められた。長方形に掘り込み、ここを中心に焼人骨の埋葬が始まっている（第17図右）。5層は、3～4層に認められる集中的な埋葬に連続すると考えられるが、これらよりも明らかに1段深くなっている。また、上下には見られない黒褐色砂が含まれており、その由来については検討が必要である。

4層では、土坑の全面に焼人骨が濃密に分布する。構成物がほぼ焼人骨からなり、土壤や砂礫をほとんど含まない。また、5・6層が広がる長方形区画の長軸と平行するように、四肢長骨が並列されており、意図的に配列された可能性がある。なお、調査中に頭骨が比較的多く認められると考えたが、部位別の深度を確認したところ、4層段階ではそうとはいえない。

3層では4層と同様、土坑の全面に焼人骨が濃密に分布する。土壤等をほとんど含まず、ほぼ焼人骨で構成する。外周を四肢長骨で方形または多角形に囲っており、配列された可能性が高いが、土坑の外周に沿うように配列されたと捉えることもできる（第17図左）。外周の配列の内側にも焼人骨が密集し、配置に関わる規則性は認められない。

2層では3・4層と同様、土坑の全面に焼人骨が濃密に分布するが、黒褐色砂の混在が顕著である。黒褐色砂は1層に共通しており、被覆する1層が焼人骨の隙間に浸透した結果と考えられる。

最終的に埋土最上位の1層が被覆して埋没が完了する。1層はⅢb層に共通しており、また、南三十稻場1式段階の土器片が出土している。現状においては、Ⅲb層が堆積したころに埋没が完了したと見ておきたい。

なお、焼人骨が集中する2～5層の間に、間層となる堆積物はほとんど認められない。すなわち、各層の間に時間差が存在するものの、長期間、露出したような状況は考えにくい。現状では、比較的短期間のうちに、断続的に集積したと考えられる。

3) 焼人骨集積土坑の焼人骨

SK439の焼人骨は概ね灰白色または白色である。骨と骨との間には間層がほとんどなく、焼土や炭化物はほとんど含まれていない。解剖学的な位置は保たれていないが、全身の骨の部位が確認されている。骨の部位としては特定の部位に偏る傾向はなく、より下の方には頭蓋骨が目立つ。また、骨には縄文時代人骨に観察されることが多い外耳道骨腫、柱状大腿骨、蹲踞面などの形態学的特徴の他に、抜歯習俗の痕跡が確認できる。骨からわかる年齢層には多様な年齢が含まれ、成人骨のほかに乳児・幼児があり、男女の両方が混在している。最小個体数は、下頸骨のオトガイ隆起部から導かれた8体に歯から推定された乳児段階の1体を加えて9個体である（註1）。

4 その他の焼人骨の概要

焼人骨集積土坑SK439以外にも焼人骨を検出し、新潟医療福祉大学で分析を実施している。

SL9131はSR103と重複して構築されており、SR103の埋め戻し後に構築された遺構である。平面形は橢円形で規模は長径約0.7mで、遺構検出面からの深さは約0.4mである（第18図）。底面から壁面にかけて強く焼けており、焼人骨（橈骨・歯根）は北側の埋土から出土している。上野遺跡では焼土を伴って焼人骨を検出する例はほとんどないため、貴重な事例である。

SK9262はSR103の東側に構築された遺構で、平面形は不整形で、長径約1.0m、短径約0.8mである（第19図）。埋土にはⅢa層に起因する土壤が堆積しており、遺跡の中でも新しい時期の埋葬事例と思われる。



第18図 SL9131焼土検出状況・完掘状況



第19図 SK9262検出状況・セクション



第20図 P10174検出状況・石鎌出土状況



第21図 P10174出土の石鎌



第22図 SK9236焼人骨状況

遺構の東側で被熱した扁平な礫が置かれており、形態的な特徴を合わせると土坑墓と考えられる。

P10174 は扁平な石を蓋石状に上面に配置する遺構で、埋土中に焼人骨が集中し、骨の間に土壌が堆積している。平面形は楕円形で長径約 0.64m、短径約 0.5m である（第 20 図）。焼人骨の量は SK439 よりも明らかに少なく、遺存状態は良好でない。焼人骨とともに石鎚が出土し（第 21 図）、焼人骨直下では炭化物を確認している。

SK9236 は P10174 に隣接する場所から検出した遺構で、第 9 次（2025 年度）調査でも継続して調査している。平面形は楕円形で、規模は長径約 0.64m、短径約 0.4m である（第 22 図）。焼人骨間に土壌が堆積していることを確認している。SK439 よりも明らかに焼人骨の検出数が少なく、焼骨間に土壌を有するなど P10174 の類似する点がある。近接した場所に両者があることが興味深い。

5 焼人骨についての若干の考察

縄文時代の焼人骨を集成し、第 1 表に掲載した（註 2）。北海道から沖縄県まで広範囲に分布している。時期としては縄文中期から確実な事例が認められ、後期以降に増加する。各県の遺跡数は 5 遺跡以下がほとんどであるが、長野県、北海道、新潟県では 5 遺跡を超え、長野県が 19 遺跡と特に多い。長野県では 1 遺跡で複数の事例が検出され、他地域でも複数事例の遺跡があることから焼人骨は偶発的な存在ではないことが分かる。

焼人骨は高温で焼かれたことで無機質となり、一般的な土壌であれば土葬の人骨よりも残りやすい。しかしながら、検出した遺跡数は 100 遺跡に満たない程度で、極めて限られている。その少なさから焼人骨の特殊性を知ることができる。出土遺構は土坑墓に限らず、配石墓や土器棺墓、包含層から検出されており、埋葬施設との関係性を示す偏りはない。焼人骨を検出する遺構では、焼土や灰、炭化物を伴う場合と、それらを伴わない場合があり、人骨を焼いた痕跡が残っている事例は少ない。岩手県上米内遺跡 RD39 土坑や RD41 土坑では、焼人骨が出土し、壁や底部が黒っぽく焼け焦げている。京都府伊賀寺遺跡の土坑 SK20 では焼土・炭化物とともに埋土が 2 層あり、掘り返されてはいるが、火葬した場所とされている。焼人骨とともに焼土や炭化物が出土する事例は多いが、遺構内は被熱しておらず、人骨を焼いた場所は別の場所と考えられていることが多い。

焼人骨は変形や細片化して部位同定が困難であるが、性別は男女ともにあり、子どもの事例もある。性別や年齢段階も偏るような傾向は見受けられない。単体以外にも最小個体数が複数個体の事例がある。5 体以上の事例としては岩手県蔴内遺跡（後・晩期）、岩手県上米内遺跡（後期）、新潟県元屋敷遺跡（後期以降）、新潟県寺地遺跡（晩期）、長野県中村中平遺跡（晩期）、愛知県伊川津貝塚（晩期）、京都府伊賀寺遺跡（後期）、大阪府西福井遺跡（後期）、大阪府鬼塚遺跡（晩期）があり、新潟県寺地遺跡、愛知県伊川津貝塚、京都府伊賀寺遺跡、大阪府鬼塚遺跡では女性や子どもを含んでいる。

上野遺跡では今のところ焼人骨を焼いた遺構は明確になっていない。焼土が形成された SL9131 では焼人骨が出土しており、人骨を焼いた遺構の可能性があるが、断定するまでには至っていない。焼人骨が出土した遺構は集落の規模に比して少ない。骨組織の分析を進めており、土葬後に焼かれたと考えられるが、一次葬となる土坑墓を含む土坑の検出数は極めて少ない。京都府伊賀寺遺跡 SK20 を参考に、焼土や炭化物を含む遺構で掘り返しの痕跡を有する遺構も含めて検討する必要がある。また、焼人骨集積土坑 SK439 では男女が混じり、子どもの骨も含まれていた。先に述べたように同様な事例は散見される。焼かれることによる変形や収縮、細片化で、性別の鑑定は困難な側面もあるが、単体でも女性とされる焼人骨がある

ことから、焼人骨を集積するに際して性別や年齢による区分はなかったものと考えられる。

6 おわりに

本稿では、上野遺跡の第7次・第8次調査の成果を報告し、焼人骨については若干の考察を試みた。本遺跡は長期的な整理作業により報告書を作成するが、現段階での所見をまとめることで、今後の整理作業にも活かせると考えたため報告した。

焼人骨集積土坑については、経過や現段階の考古学的な所見を記載した。現場作業と同時に新潟医療福祉大学で調査を進め、第8次調査の期間で焼骨の取り上げが完了し、遺構の掘削や記録作業も終了したため、本報告に含めて記載した。また、全国的な集成により若干の検討を試みたが、その希少性からその具体的な背景を説明するまで至っていない。人類学的な分析結果も含めて、再度、検討が必要である。

最後に、本遺跡の調査にご協力頂いた地域の方々やご指導頂いた方々に感謝を申し上げる。

註

- 1) 新潟医療福祉大学の奈良貴史氏のご教授による。
- 2) 繩文時代の出土焼人骨一覧は、過去の文献〔石川 1988、設楽 1993〕や墓制に関する資料集〔南北海道情報交換会 第20回記念シンポジウム実行委員会 1999、関西縄文文化研究会 2000、縄文時代文化研究会 2019、長野県内遺跡出土古骨データベース (<https://naganomaibun.or.jp/news/21566/>)〕を参考に把握し、各文献にあたって作成した。また阿部友寿氏、加藤隆則氏に事例等をご教示頂き、深澤太郎氏・山口晃氏に文献収集のご協力を頂いた。なお、本一覧の責任は加藤元康にある。

引用文献

- 石川日出志 1988 「縄文・弥生時代の焼人骨」『駿台史学』74 pp.84-110 駿台史学会
関西縄文文化研究会 2000 『関西の縄文墓地資料集』
新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2019 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 281集 上野遺跡 I 第1次調査』
設楽博巳 1993 「縄文時代の再葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集 pp.7-46 国立歴史民俗博物館
品田高志 1999 「越後における縄文後期住居の検討－柱穴配置による住居認定への模索－」『新潟考古学談話会会報』第20号 pp.35-39 新潟考古学談話会
平 慶子・奈良貴史・加藤 学・石川智紀 2023 「縄文時代後期の焼人骨集積土坑の調査」『季刊考古学』第164号 pp.93-94・97-98 雄山閣
富樫真理 2018 「早稲田の歴史」『早稲田里山の自然と歴史 新潟県村上市早稲田「里山」自然調査研究所』 pp.105-120 早稲田里山研究会
南北海道情報交換会第20回記念シンポジウム実行委員会 1999 『北日本における縄文時代の墓制資料集』
新潟県農地部 1991 『土地分類基本調査 塩野町』新潟県
新潟県埋蔵文化財センター 2025 『発掘！新潟の遺跡 2024』新潟県埋蔵文化財センター・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
縄文時代文化研究会 2019 『列島における縄文時代墓制の諸様相』

第1表 縄文時代の出土焼人骨一覧（1）

	所在地	遺跡名	遺構名	遺構所見	時期	人骨所見	引用・参考文献
1	北海道 苫小牧市	柏原18遺跡	10号墳墓	9号墳墓より新しい。焼骨群は60cm×35cmの範囲で検出され、強度の火熱を受けて白色の細小破片化していた。土坑は楕円形の長軸約50cm、短軸50cmで、断面形は深皿状を呈し、検出面からの深さ13cmであった。層序は下部で焼骨群が5cmほどの厚さで堆積。既然で細片化した小型の短頸窓、滑石製の丸玉で変色している。	晩期	頭蓋が中央に位置し、押しほぶされたような状態。人骨は強烈な火熱を受けている。頭蓋の一部、臼歯2、破片となった肋骨片、四肢骨（中手・中足・指骨）。主要骨は割れたり、裂けたりしてその一部を残すのみ。四肢骨では成人の域に達している。	苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1995『苫小牧東部工業地帯の遺跡群』苫小牧市教育委員会
2	北海道 千歳市	美々4遺跡	P-59	平面形は楕円形、長軸120cm、短軸110cm。中央部からシラカンハ漏と思われる樹皮を用いた0.7×0.45mの容器状のものを検出。容器状のものは、底面に1枚の樹皮、済曲した画面に2-3枚を組み重ねて作られている。樹皮は焼成した部分が認められる。頭蓋と上顎骨、歯冠から南東方向へ、歯は焼けた可能性がある。深鉢と豈、垂乳が出土している。深鉢の底部付近からは、焼けた歯骨が出土している。	晩期後葉	小さな骨片約10個、破損し完形を示さない歯骨のエナメル質部分少數を残す。性別・年齢は推定できない。歯牙はいずれも表面が黒っぽく変色している。頭蓋骨は内部硬直化し、火に焼かれたような感じを受ける。しかし、わずかに残る2枚の臼歯は正常で、焼成を示す所見はない。頭蓋の焼成は不自然。歯冠には明らかに焼成を思われる所見が出現しており、実験によつてもそれを否定しえない結果が出ている。	北海道埋蔵文化財センター-1984 北海道埋蔵文化財センター-調査報告書14：美沢川流域の遺跡群Ⅴ 北海道埋蔵文化財センター、財團法人北海道埋蔵文化財センター 1997『北海道埋蔵文化財センター調査報告書：美々・美沢川・北海道埋蔵文化財センター』
3	北海道 千歳市	美々5遺跡	MP-36	平面形は楕円形で、土壤底面から人骨を検出。残っている人骨は届屈と考えられる。焼人骨と未人骨が混在。頭蓋のまわりに焼成および炭化物が密着するような状態で検出され、玉が1点出土。	後期	成年骨の頭体分を同定。この他、総重量50gの焼骨片を検出し、骨片はいずれも熱を受けて収縮。環椎前弓、椎体及び椎弓、左肩甲骨の破片、左側の角状骨、左第2中手骨、指の末節骨。未端骨の骨片が複合するので見分け難く、性別不明。末節骨片や四肢長骨が見当たらぬので、1個体分を構成しているとは思われない。前の成人の一部であるのが、まったく別個体であるのは明らかでない。	財團法人北海道埋蔵文化財センター-1981「財團法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書3：美沢川流域の遺跡群Ⅳ（第1回）-美々5、美々6、美々7、美沢1、美沢3」財團法人 北海道埋蔵文化財センター
4	北海道 富良野市	無頬川遺跡	A区Pit20	ほぼ円形の土坑で、規模は80cm×70cm、深さ50cmである。覆土の上部には黒曜石のチップを多量に含む土層で、下に行くにつれて、炭化物が混在。南側の底面近くから人骨を掘り下に向けるような姿勢で焼土に包まれるように出土。人骨の上に、長さ15cm、直径4cmの炭化物が残る。礫10数個を覆土から検出。	晩期後葉	頭蓋骨の椎弓。椎骨を主とし、椎体と椎弓の破片。尺骨骨体の遠位端と思われる長骨。頭蓋骨の色調は乳白色、やや青色を帯びた白色をしたものが多い。椎骨も熱により白く変色。頭骨は長軸方向に裂け、変形している。男性の可能性が高い、熟年と考えられる。	富良野市教育委員会1988『富良野市文化財調査報告4：無頬川遺跡』富良野市教育委員会
5	北海道 余市町	大川遺跡	GP-399	径22.3×18.5m、深さ約19cmの長い楕円形。上面は同心円状に外側から炭化物を主体とする黑色砂が8cmの幅で確認され、その内側にベニガラ混じりの砂質粗粒が30cm程の幅で覆っている。厚さ50cm程の砂層下にベンガラの範囲を確認。ベンガラ直下から全体の合葬。北側から遺体1~5。遺体上面が全般的に黒色を呈し、火葬墓と推定。	晩期前半	-	余市町教育委員会2001『大川遺跡における考古学的調査：大川遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会
6	北海道 余市町	大川遺跡	GP-432	径17.0×11.5m、深さ約77cmの圓丸形。上面に配石。坑底部中央にベンガラの範囲を確認。ベンガラ除去後に東側を中心に戸部より遺体確認。	晩期前半	-	余市町教育委員会2001『大川遺跡における考古学的調査：大川遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会
7	北海道 余市町	大川遺跡	GP-445	径20.3×16.5m、深さ約75cmの長い楕円形。ピット上面に配石。墓塚の北東50cm程の所に2.5×15cmの高さ49cmの立石、配石中央に異形土器出土。2体合葬にベンガラが厚く埋積。両方の遺体の上面および両脇に炭化物が検出され、火葬墓と思われる。	晩期前半	-	余市町教育委員会2001『大川遺跡における考古学的調査：大川遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会
8	北海道 余市町	大川遺跡	GP-449	径1.93×1.30m、深さ約105cmの長い楕円形ピット、上面はやや大形の裸が配され、南側に燈芯土器が出土。坑底部にベンガラで厚く覆われた遺体を検出。腐食が著しい。ベンガラの上面から南側と遺体の両脇に炭化物を検出し、火葬墓と考えられる。	晩期前半	-	余市町教育委員会2001『大川遺跡における考古学的調査：大川遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会
9	北海道 余市町	大川遺跡	GP-460	径1.26×1.12m、深さ約90cmの長い楕円形。ピット上面に配石、その南寄りに立石、ほぼ中央に土器底部が出土。ベンガラで厚く覆われた遺体を確認。腐食が著しく。ベンガラの上面から南側と遺体の両脇に炭化物を検出し、火葬墓と推定。遺体上面北西側より塗漆の輪輪4点が出土。	晩期前半	-	余市町教育委員会2001『大川遺跡における考古学的調査：大川遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会
10	北海道 余市町	大川遺跡	GP-505	径1.26×0.84m、深さ約45cmの長い楕円形。埋土上面に注口土器・皿形土器が出土し、中位に壇を確認。ベンガラ混じりの遺体を検出。腐食が著しく。頭部等の細部不明。遺体正面は黒色を呈し、火葬墓の可能性がある。	晩期前半	-	余市町教育委員会2001『大川遺跡における考古学的調査：大川遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会
11	北海道 斜里町	朱丹栗沢遺跡	A号-13号土坑墓	A号土坑第13号は火葬後の骨片を埋葬してあった。	後期末~晩期初頭	-	河野広道1957『先史時代史』(斜里町史) 28斜里町史編纂委員会
12	北海道 斜里町	朱丹環状土塚	A号土塚13号	火葬後の骨を埋めたのが1例ある。火葬骨に付着して、着衣のアソシの一部とみられる小片も発見された。	晩期	-	河野広道1981『斜里町栗沢台地の調査』(河野広道ノート考古編I北海道東北部の考古学的調査) 北海道出版企画センター、pp.118-119
13	北海道 斜里町	ビラガ丘遺跡秋山地点	PIT36	やや角ばった楕円形で、規模は1.9m×1.6m、深さ0.7mである。浅鉢状の掘り込みであるが、人体を安置した部分だけやや僅みを持ち床面が段階になっていた。上層部に木炭、土器を置く。焼け跡も伴っていた。木炭は上層と下層の2か所で見られ、下層部の木炭は火葬の脇（横腹の脇や下）から全身を覆うように置かれていた。ベンガラも寛骨の右側にしみられた。下層部には木炭と土器、石器、装身具（サメの歯）があった。埋葬方法は仰臥屈葬で、手は胸の上で右腕を上にして差さされていた。	晩期	全身の骨格が残存していたが、火を受けて細片に分かれている。左鎖骨の縫結節は強く発達。大腿骨は骨体に柱状形成が認められる。脛骨は骨体のはば中央で、大きく述べ平である。大腿骨や脛骨の骨体は太く、男性と推定。椎骨の関節面に關節症性の変異があり、成人大腿に達していた可能性が高い。牡牛前脚の女性のはば骨体の八分の八と認定。	斜里町教育委員会1990『斜里町文化財調査報告4：ビラガ丘遺跡秋山地点』斜里町教育委員会
14	北海道 斜里町	ビラガ丘遺跡秋山地点	V層	-	1989年度出土の資料は焼けており同定は困難であったが、ヒトの歯を確認することができた。四肢骨破片もみられ、すべて人骨と認される。	-	斜里町教育委員会1990『斜里町文化財調査報告4：ビラガ丘遺跡秋山地点』斜里町教育委員会
15	青森県 青森市	松山遺跡	土器棺No1	昭和53年4月の農作業中に土器棺3個が出土し、うち1個に人骨が入っていた。	後期前半(十腰内1式)	-	葛西 动2002「第2章 土器棺内の人骨と副葬品」「再葬土器棺墓の研究」「再葬土器棺墓の研究」刊行会
16	青森県 六ヶ所村	土居駅(2)遺跡	C-26号配石	DE-172グリッドに位置する。大形縹5個により構成され、南側が解放されたコ字形状を呈する。下部に土坑が確認された。土坑は、開口部115×100cm、底面58×80cm、深さ50cmで、底面から焼成された人骨が破片状で検出された。また、人骨の10cm程上面から赤色顔料が小ブロックで出土した。人骨は成人1個体分と考えられ、土坑底面中央に埋葬されていた。	後期前葉(十腰内1式)	骨片は白色を呈し、細かにび割れし、一見して焼骨であることが分かる。骨片は焼き落としまって硬直化し、ねじれて変形している。焼き割れて細片とよどんでいる。保存状態が極めて悪く、部位ごとに同定できたのは数片に過ぎない。第1頭椎(環椎)の外側塊、横突孔から先の椎体の先端部欠損。肋骨片4個。左肋骨の筋節結合付近の破片、右肋骨の被破片、左右不詳の肋骨骨片。椎骨体または椎弓の一部と思われる破片。重複する部位が見られないため、1個体分の人骨とみなして差し支えないと想われる。取締されているが、成人骨としての十分な大きさを保有しているので、成人骨と考えて良い。	青森県埋蔵文化財調査センター 1988『青森県埋蔵文化財調査報告書115：土居駅(2)遺跡』青森県教育委員会
17	青森県 三戸町	泉山遺跡	Ⅲ区B-9グリッドⅢ層	-	焼けた人骨片。保存状態は不良。合計3個。人骨片であるが骨片が小さく人体のどの部分の骨であるか確定できない。	前期~後期	青森県教育府文化課1976『青森県埋蔵文化財調査報告書31：泉山遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
18	青森県 三戸町	泉山遺跡	Ⅲ区第7号フ拉斯コ状ビット上面	口径126cm、146cm、頸径125cm、底径225~226cm、深さ90cm。上部に縫があり、石器が出土している。	中期(円筒上縁e)	焼けた人骨片。保存状態不良で、骨片約30個と大きな骨片1個が土中に散乱。細骨片の骨格は不詳で、大きな骨片は成人の肋骨骨頭の一部と思われる。性別は不明。	青森県教育府文化課1976『青森県埋蔵文化財調査報告書31：泉山遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
19	岩手県 盛岡市	蔵内遺跡	F-286	隅丸方形土坑(182cm×158cm)、深さ82cm。底面は皿状。副穴を有し、人骨が入っている。	後~晩期	骨片は色調が白色ないし灰白色を呈し、表面に小さなひび割れが生じておるから、細かにび割れし、一見して焼骨であることが分かる。骨片は焼き落としまって硬直化し、ねじれて変形している。焼き割れて細片とよどんでいる。保存状態が極めて悪く、部位ごとに同定できたのは数片に過ぎない。第1頭椎(環椎)の外側塊、横突孔から先の椎体の先端部欠損。肋骨片4個。左肋骨の筋節結合付近の破片、右肋骨の被破片、左右不詳の肋骨骨片。椎骨体または椎弓の一部と思われる破片。重複する部位が見られないため、1個体分の人骨とみなして差し支えないと想われる。取締されているが、成人骨としての十分な大きさを保有しているので、成人骨と考えて良い。	(財)岩手県埋蔵文化財センター 1982『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書32：盛岡市 蔵内遺跡』(財)岩手県埋蔵文化財センター

第1表 繩文時代の出土焼人骨一覧（2）

所在地	遺跡名	遺構名	遺構所見	時期	人骨所見	引用・参考文献
20 岩手県 盛岡市	上米内遺跡	RD39土坑	洋梨形。壁や底部が黒っぽく焼け焦げている。長径1.6m、深さ30cm。砂礫の混じる黒褐色の土に大量の人骨破片と炭化物が出土。骨片のなかには頭骨や大脛骨など部位推定可能な骨もあったが、かなり混じっており、頭頂・埋葬形態は不明。	後期	少なくとも8個体以上の骨。小児の骨を含む。頭蓋骨片778個のうち、53個の部位を同定。上頸骨は左側5個、右側3個を同定。左側と右側で対にならないことから、8個体分を想定。小児の下顎骨が含まれる。椎骨は1524個の骨片。輪椎の歯突起が4個存在し、いずれも成人。肋骨241個、第一肋骨3個を除くと小片のため同定不可能。上肢骨204個、下肢骨71個、部位不明な骨管骨39個。	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書」 220: 上米内遺跡発掘調査報告書 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
21 岩手県 盛岡市	上米内遺跡	RD41土坑	椭円形。底部や壁には塵が露出し、壁や底部は黒っぽく焼け焦げている。長径7m、深さ30cm。黒褐色の土にには大量の人骨破片と炭化物が出土。骨片には頭骨や大脛骨などの部位推定の可能なものがあったが、混じった状況で頭頂や埋葬形態は不明。彝形土製品が出土し、この土坑で火葬して埋葬したと思われる。	後期末葉	少なくとも10個体以上の骨。小児の指の骨が認められる。3000以上の骨片のうち、部位同定はほぼ1/8程度。頭蓋骨片1003個、104個の部位を同定。上頸骨の初代輪椎合消失または外側が焼成跡で残存する程度であるため20~30歳と思われる。5個で抜歯の痕跡を確認。下頸骨23個、右側白南部下頸骨は10個認められたため、少なくとも10個体が埋葬。4個下頸骨の抜歯の痕跡。椎骨282個の骨片、環椎1個、輪椎の歯突起9個存在し、いずれも成人。上腕骨滑車、橈骨頭、尺骨頭を多く確認。上手骨48本、第三中手骨左右ともに10個出土。少なくとも10個体を埋葬。肋骨413個、上肢骨184個、下肢骨10個。部位不明な骨管骨95個。	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書」 220: 上米内遺跡発掘調査報告書 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
22 岩手県 北上市	八天遺跡	G-26-1遺構	85×80cmの円形。深さ38cm。土器片2、イノシシ下顎骨も出土。表土層を削除した発見当初は白い骨片を多く含む黒い埋土のビットと認識。埋土は全体が黒色土で炭化物、焼土は含まず層序も存在しない。	後期初頭	焼骨の総重量は664.5kg。椎骨、肋骨、胸骨、頭蓋骨、歯を含む。四肢骨、手、足骨を同定。四肢骨が骨片がごく少ないので、手足の傾向で、骨片を含むものがいる。歯突起歯を含む前臼歯の破片が3枚。少なくとも3個体の人骨がある。1枚は歯突起開閉面に強度の歯縫骨増殖があり、高年齢と示唆。2枚は正常であり、1例は特に小さく、未成年の可能性もある。手根骨15個のうち、右の舟状骨が2点、月状骨93点含まれ、少なくとも10個体の骨が存在。少なくとも成人口個体と10歳以下の未成年者の骨体が含まれる。骨片は個体分に満たず、断片的で部分的にしか保存されていない。成人の骨管骨は老年性の変化がみられる。このほか、イノシシの左下顎頭が1点同定された。	北上市教育委員会 1978「文化財調査報告書24: 八天遺跡」北上市教育委員会
23 岩手県 北上市	八天遺跡	H-53-1遺構	140×130cmの方形。隅丸形に近いプラン。深さ25cm。土器片2、凹石11出土。遺構確認面では骨は露出せず、埋土は炭化物、焼土等を含まない地山の土質に近い。層序も分離できず。骨は底面に近い部分で出土。筋骨や他の骨片がぎわめて散在していた。土坑の西半分にやや多い。	後期後半	総重量は297g。少なくとも成人口個体の焼けた人骨が含まれている。全身の骨の成人口標準重量約15kgに比べて、量はかなり少ない。椎骨、肋骨、胸骨、頭蓋骨、上肢骨、手骨、下肢骨、足骨を同定。骨片を全骨としてかなりよく焼けており、大小のひび割れと歪みを示す。ほとんどが灰白色を呈するが、なかには深く黒みを帯びた部分もみられる。女性のものと推察される右上頸骨骨縫突起部前の破片、下頸骨オトガイ部の破片が焼いている。右中手手骨2本が完全な形で残っており、前者が女性、後者は純然たる女性および現生女性の平均値とはほぼ一致する。成人口個体分の全身骨格の各部がごく不完全に残っている。大きさから男性と女性である可能性が考えられるが判別精度は低い。	北上市教育委員会 1978「文化財調査報告書24: 八天遺跡」北上市教育委員会
24 岩手県 一関市	熊穴洞穴 遺跡	—	人骨のほとんどが洞内北側で発見され、南側で出土していないが、南側は過去の調査で出土している可能性がある。第1号人骨より洞口部に向かって約2.5mの地点で発見された。角礫の下に3個体以上の頭蓋骨あるいは連続して安置されていた。頭蓋骨の上あるいは大腿骨、椎骨あるいは下頸骨がまとまって出土した。その之下にも角礫が散在している。状況からすると第2号人骨は1個体づつ埋葬されたものではなく、同時に埋葬されたものであるが、頭蓋骨の向きは一定でない。	晩期後葉	3号人骨下頸3の成年性別不明の右関節突起を残す骨。骨は焼かれており、黒灰色に変色している。3号人骨は少なくとも6個体分の頭骨が同定される。	岩手県立博物館 1985「岩手県立博物館調査研究報告書1: 熊穴洞穴遺跡発掘調査報告書」岩手県立博物館
25 秋田県 横手市	八木遺跡	第2区 LH81地点	第2区包含層から検出。	後期初頭～中葉	16歳位の骨に附したおそらく男性1個体分の火葬骨。総重量は945gで個体分。骨はかなりの高温で焼かれたと思われ、手及び足指の一部を除いて小骨片と化し、収縮、変形が著しく、しかも骨表面に無数の亀裂が認められる。色調は部位によって異なり、黒灰色、灰色および白色のものが認められる。意図的に焼かれた、すなわち火葬されたものと考えてさしつかえない。	秋田県埋蔵文化財センター 1989「秋田県文化財調査報告書181: 八木遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会
26 秋田県 横手市	虫内1遺跡	LN45A ウ Ⅲ層	遺物包含層	後期後葉～晩期前葉	長骨の破片点。他の破骨と同様に灰白色を呈しており、保存状態もあまり良くない。ヒトの骨はこれが唯一である。	秋田県埋蔵文化財センター 1998「秋田県文化財調査報告書274: 虫内1遺跡」秋田県教育委員会
27 秋田県 北秋田市	藤株遺跡	SK05	193×95cmの椭円形の土壤墓。初めは焼土と灰が楕円形状に広がっており、それによりプランを確認。遺物は土壇面に多く、土器片とフレーク・チップがあり、特別な副葬品はない。下骨は2層の灰と4層の焼土に覆われて出土し、土坑内南側の底面からは、炭化した木片も認められた。下骨の骨は細部で飛び散ったような状態で検出。深さは確認面から10cmほど、実際の掘り込み面は2倍の上面とを考えられる。骨の出土状態からは、二次的埋葬とは考え難く、土坑内で火葬したものと考えられる。	晚期：大洞B期	人骨は1個体分と考えられるが、全身的に強い被熱をうけて変形し、白骨ないし灰白色に変色。右上腕骨以外は小片あるいは細片と化している。火熱による灰化の度合いの弱い、黒灰色の骨片はすべて保存状態が悪い。下肢骨の破片と思われる骨片が、土坑の南端西側に集中し、上股骨、椎骨が西北西位に位置し、寛骨片だけは中央に分布している。右の上腕骨、前腕骨、手骨が解剖学的位置を保って不規則で、頭骨の骨頭が全く認められない点は変形的であるが、全体としては、仰臥伸展位をとったものと推測。成人口女性と推定。成年なし。新耳上腕骨と遠位端、前腕骨の近位端および遠位端の骨頭が完了し、椎骨関節空腔、肘関節、橈骨手根関節、手根間関節、仙腸関節、腕骨関節に全く年齢層内に分布していないことから、他の場所で焼かれたものと推測。前腕骨の骨幹位が小さくこと、大座骨切迹部の形態がどちらかというと女性的。右前腕の橈骨と尺骨は比較的大く保存されているが、ひび割れがちて、かなりの変形を受けている。	秋田県教育委員会 1981「秋田県文化財調査報告書85: 藤株遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会
28 山形県 村山市	宮の前遺跡	第I調査 区C-7グリッド	—	後期後葉～晩期	焼骨はすべて人骨。小さな破片となっていたが、頭蓋骨を確認。四肢骨と同様に灰白色を呈しており、保存状態もあまり良くない。ヒトの骨はこれが唯一である。	山形県埋蔵文化財センター 1995「山形県埋蔵文化財センター調査報告書19: 宮の前遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター
29 福島県 福島市	宮畠遺跡	SK574	80×60cmの長い椭円形の土坑で、深さ最大30cm。骨片が混ざった黒褐色シルトが堆積。	後期中葉	頭蓋、体幹、上肢、下肢骨を同定。いずれも白色を呈し、細かな破片で、骨体表面に微細なひび割れが生えるなど、焼骨の特徴を示す。多量の骨片は主要骨だけではなく、末節骨など微細な骨片もみられる。頭蓋骨は繩文時代のもので閉じている状態が確認でき、若くても熱年(40~50歳程度)に運んでいたと思われる。収縮、変形を考慮しても右舟状骨が比較的大きく男性的である。遺構内に均一に骨片が混ざる点を考慮すると、骨と骨片たる状態で一個体分の全身骨格が遺構内に埋められたと考えられる。	福島市教育委員会 2010「福島市埋蔵文化財報告書206: 史跡宮畠遺跡」福島市教育委員会
30 福島県 福島市	宮畠遺跡	582号土坑	長軸125mの楕円形の土坑。掘り込みは浅く、遺構の中央部分を中心に多量の焼骨片が混ざっている。全體に混ざっており、土に混ざった状態で土坑内に埋め戻されたものと思われる。半裁した分を水洗選別した。	後期中葉 (加賀利B式期)	いずれも白骨を呈した細片で、骨体表面に細かなひび割れが生じるなど、焼骨の特徴がみられる。頭蓋、上顎骨、椎骨、腰骨、大脛骨、小脛骨、脛骨、距骨など。年齢・性別は推定できる部位が多くなく不明。主要部位がみられるが、個体分とみて極めて少なくことがある。他の場所で焼かれたものと推定。	福島市教育委員会 2008「福島市埋蔵文化財報告書196: 史跡宮畠遺跡」福島市教育委員会、福島市教育委員会 2010「福島市埋蔵文化財報告書206: 史跡宮畠遺跡」福島市教育委員会
31 福島県 伊達市	根古屋遺跡	第1墓坑 2号棺	第1墓坑は楕円形の短軸0.8m、長軸1.1m、深さ0.3mで墓坑内から6個体の土器が出土している。	晩期末	骨はいずれも灰白色を呈するほどよく焼けている。1cmほどの頭骨片点。	梅宮 茂他1986「靈山根古屋遺跡の研究」靈山町教育委員会
32 福島県 伊達市	根古屋遺跡	第1墓坑 4号棺	第1墓坑は楕円形の短軸0.8m、長軸1.1m、深さ0.3mで墓坑内から6個体の土器が出土している。	晩期末	左脛骨下端の一部、その他長管骨骨体の小片3点。1cmほどの貝殻1点。	梅宮 茂他1986「靈山根古屋遺跡の研究」靈山町教育委員会
33 福島県 伊達市	根古屋遺跡	第1墓坑 1号棺	第2墓坑は直径1.1m、深さ0.35mの墓坑。3個体土器が収納。1号は正位で出土。	晩期末	5cm以下の頭骨片30余点。四肢軸幹骨片100点以上。前頭骨眼窓部、側頭骨、蝶形骨、肩甲骨軸部、脛骨骨体の一部などが同定された。ほぼ全身の骨から偏りなく抽出されているように見られる。10点ほどの骨片の内面は炭化して黒くなっている部分が認められる。	梅宮 茂他1986「靈山根古屋遺跡の研究」靈山町教育委員会
34 福島県 伊達市	根古屋遺跡	第3墓坑 2号棺	第3墓坑は楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸0.8m、深さ0.4mで、6個体の土器が出土している。	晩期末	2cmほどの骨片2点、3cmほどの四肢骨片4点、他の不明小片3点。腰骨・尺骨の骨体一部が認められる。	梅宮 茂他1986「靈山根古屋遺跡の研究」靈山町教育委員会
35 福島県 伊達市	根古屋遺跡	第3墓坑 3号棺	第3墓坑は楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸0.8m、深さ0.4mで、6個体の土器が出土している。	晩期末	数cm以下の頭骨片約20点。四肢骨片20余点。椎骨片若干。前頭骨眼窓部を同定。大脛骨骨体一部2点、膝骨骨体小片3点が認められた。全身から偏りなく抽出されている。数点の骨片では内面に炭化部分がある。	梅宮 茂他1986「靈山根古屋遺跡の研究」靈山町教育委員会
36 福島県 伊達市	根古屋遺跡	第3墓坑 4号棺	第3墓坑は楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸0.8m、深さ0.4mで、6個体の土器が出土している。4号土器は正位で5号土器と接近している。	晩期末	頭骨片3点、四肢骨片10余点。	梅宮 茂他1986「靈山根古屋遺跡の研究」靈山町教育委員会

第1表 繩文時代の出土焼人骨一覧（3）

所在地	遺跡名	遺構名	遺構所見	時期	人骨所見	引用・参考文献
37 福島県伊達市	根古屋遺跡	第3墓坑5号棺	第3墓坑は楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸0.8m、深さ0.4mで、6個体の土器が出土している。	晩期末	頭骨小片2点、四肢骨片10余点。脛骨骨体の一部が認められる。上腕骨骨体の一部と考えられる骨片は内面に炭化した部分が付着している。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
38 福島県伊達市	根古屋遺跡	第4墓坑1号棺	第4墓坑は楕円形で長軸1.1m、短軸0.75m、深さ0.5mで、第5号墓坑と切り合いで第5墓坑より古い。墓坑内からは3個体の土器が出土している。	晩期末	頭骨片3点、その他小片20点ほど。前頭骨の環状縫合部分を同定。炭化した骨片が若干ある。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
39 福島県伊達市	根古屋遺跡	第5墓坑1号棺	第5墓坑はほぼ楕円形を呈する。長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.45mで、8個体の土器が収納された。1号棺は正位である。本墓坑の切り合いで第4墓坑よりも新しい。	晩期末	頭骨片8点、その他小片20点ほど。前頭骨眼窓部、下頸骨右臼歯部の歯槽を確認。他に椎骨の破片がやや目立つ。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
40 福島県伊達市	根古屋遺跡	第6墓坑2号棺	第6墓坑は楕円形で、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.4mを、墓坑内からは5個体の土器が出土している。1号土器の上にあたかも供えられた状況で出土した。	晩期末	3cm以下の頭骨片30点、椎骨片4点、肋骨片10点、手足骨8点、その他の管状骨小片20点。前頭骨眼窓部、上下頸歯骨小片、環椎一部、右第1中足骨、足の第1基節骨。中足骨と基節骨ばかりでなく大きく、男性のものと考えられる。部分的に炭化した骨片数点。全身各部の骨が含まれる。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
41 福島県伊達市	根古屋遺跡	第6墓坑3号棺	第6墓坑は楕円形で、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.4mを、墓坑内からは5個体の土器が出土している。	晩期末	頭骨の小片10点、椎骨片数点、その他四肢骨片10点余り。側頭骨骨体、下頸骨歯槽の一部を確認。部分的に炭化しているものの数点。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
42 福島県伊達市	根古屋遺跡	第7墓坑1号棺	第7墓坑は長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.3mで5個体の土器が収納されていた。墓坑からは少量の骨片と10cm内外の繭3点が出土。	晩期末	頭骨小片数点、その他の骨片20点ほど。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
43 福島県伊達市	根古屋遺跡	第7墓坑5号棺	第7墓坑は長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.3mで5個体の土器が収納されていた。墓坑からは少量の骨片と10cm内外の繭3点が出土。	晩期末	数cm以下の頭骨片約10点、その他骨片100点ほど。左頸骨の一部、下頸骨オトガイ部から左第1大臼歯まで。下頸骨に抜歯、腸骨翼片、左肩骨鈎骨、左第1中手骨基部を同定。他に胸椎椎体。全身各部から採取されている。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
44 福島県伊達市	根古屋遺跡	第8墓坑1号棺	第8墓坑は楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.45mを測り、なかに12個体の土器が収納されていた。骨片が混じり合う大きな第9号土坑墓の上に當まれたもの。本墓坑からは鰐刃石斧1点が出土している。	晩期末	2.5cm程の頭蓋冠の破片1点のみ。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
45 福島県伊達市	根古屋遺跡	第8墓坑2号棺	第8墓坑は楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.45mを測り、なかに12個体の土器が収納されていた。骨片が混じり合う大きな第9号土坑墓の上に當まれたもの。本墓坑からは鰐刃石斧1点が出土している。	晩期末	頭骨片9点、その他20点余。下頸骨が3個体出土。1点は5歳前後と推定、他2点は性別不明の左下頸枝の一部。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
46 福島県伊達市	根古屋遺跡	第10墓坑1号棺	第10墓坑は直径0.7m、深さ0.3mの円形の小墓坑で、なかより2個体の土器が出土している。	晩期末	長骨小片4点、他に不明小片2点。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
47 福島県伊達市	根古屋遺跡	第10墓坑2号棺	第10墓坑は直径0.7m、深さ0.3mの円形の小墓坑で、なかより2個体の土器が出土している。	晩期末	前頭骨片1点、その他10点ほど。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
48 福島県伊達市	根古屋遺跡	第11墓坑2号棺	第11墓坑は楕円形の小墓坑で、長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.25mで、3個体の土器が出土。本墓坑は1号土坑墓と切り合い関係にあるが1号土坑墓とは新しい。	晩期末	頭骨小片3点、その他7点。わずかに炭化した部分が認められた。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
49 福島県伊達市	根古屋遺跡	第12墓坑1号棺	第12墓坑は楕円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.4mで測り、なかに12個体の土器が収納されていた。1号土坑、19号墓坑よりは12個体の方が新しい。	晩期末	四肢骨片十数点、椎骨骨体の小片が認められる。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
50 福島県伊達市	根古屋遺跡	第12墓坑5号棺	第12墓坑は楕円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.4mで、第19墓坑、1号土坑と切り合い関係があり、1号土坑、19号墓坑よりは12個体の方が新しい。	晩期末	頭骨片2点。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
51 福島県伊達市	根古屋遺跡	第13墓坑1号棺	第13墓坑はほぼ円形を呈し、直径1.3m、深さ0.5mで、なかより2個体の土器が出土している。表土層下の2層はCクリップ付近の骨片層が流れ込んで人骨片が含まれている。	晩期末	頭骨片2点。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
52 福島県伊達市	根古屋遺跡	第13墓坑2号棺	第13墓坑はほぼ円形を呈し、直径1.3m、深さ0.5mで、なかより2個体の土器が出土している。表土層下の2層はCクリップ付近の骨片層が流れ込んで人骨片が含まれている。	晩期末	頭骨片5点、その他50点ほど。下頸骨オトガイ部、上頸左第2臼歯1点も認められる。手足の骨が比較的多い（5点）。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
53 福島県伊達市	根古屋遺跡	第14墓坑1号棺	第14墓坑は13号墓の直下にあり、長楕円形で、長軸0.75m、短軸0.6m、深さ0.4mで、3個体の土器が収納されている。	晩期末	頭骨片10点ほど、その他約10点。左舟状骨、中手骨、手足の基節骨各1点。坐骨の一部、大腿骨下端の小片も確認された。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
54 福島県伊達市	根古屋遺跡	第15墓坑4号棺	第15墓坑は大型の楕円形の墓坑で、長軸1.6m、短軸1.23m、深さ0.45mで、墓坑内から正位で整然と10個体の土器が収納されていた。	晩期末	頭骨片1点、髪骨骨体小片1点、その他小片3点。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
55 福島県伊達市	根古屋遺跡	第15墓坑5号棺	第15墓坑は大型の楕円形の墓坑で、長軸1.6m、短軸1.23m、深さ0.45mで、墓坑内から正位で整然と10個体の土器が収納されていた。	晩期末	頭骨片6点、その他10余点。側頭骨錐体岩様部、左上頸骨体（抜歯あり）、下頸左第3臼歯が確認された。上腕骨滑車の一部、下頸骨骨体の破片、右脛骨下端も認められた。胫骨には小さな内側蹠蹠筋が認められる。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
56 福島県伊達市	根古屋遺跡	第15墓坑6号棺	第15墓坑は大型の楕円形の墓坑で、長軸1.6m、短軸1.23m、深さ0.45mで、墓坑内から正位で整然と10個体の土器が収納されていた。	晩期末	頭骨片1点、その他3点。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
57 福島県伊達市	根古屋遺跡	第16墓坑1号棺	第16墓坑は1号土坑墓の上に當まれたもので、ほぼ円形のブランを持ち、直徑0.75m、深さ0.3mで5個体の土器が出土している。	晩期末	四肢骨片数点。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
58 福島県伊達市	根古屋遺跡	第16墓坑2号棺	第16墓坑は1号土坑墓の上に當まれたもので、ほぼ円形のブランを持ち、直徑0.75m、深さ0.3mで5個体の土器が出土している。	晩期末	頭骨片6点、その他50点ほど。左鎖骨、脛骨骨体の一部、左脛骨内側などが認められる。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
59 福島県伊達市	根古屋遺跡	第16墓坑3号棺	第16墓坑は1号土坑墓の上に當まれたもので、ほぼ円形のブランを持ち、直徑0.75m、深さ0.3mで5個体の土器が出土している。3号淺鉢土器は4号土器を覆っている。	晩期末	頭骨片2点、その他20点ほど。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
60 福島県伊達市	根古屋遺跡	第16墓坑4号棺	第16墓坑は1号土坑墓の上に當まれたもので、ほぼ円形のブランを持ち、直徑0.75m、深さ0.3mで5個体の土器が出土している。	晩期末	全身骨片200余点。幼児、少年、成人。幼児骨片は下頸乳切歯、上頸第1乳臼歯、未放出の永久歯、5歳前後と考えられる。その他、頭蓋冠破片、左頸骨、坐骨、足の基節骨を確認。幼児は1個体に属する。少年は9cmの上腕骨骨体下半分のみ。成人骨片10点。歯、輪椎、胸骨体、左大菱形骨、右鎖骨、右第3楔状骨、手足指骨数点。右第3楔状骨は2点があるため、2個体以上のもの。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
61 福島県伊達市	根古屋遺跡	第16墓坑5号棺	第16墓坑は1号土坑墓の上に當まれたもので、ほぼ円形のブランを持ち、直徑0.75m、深さ0.3mで5個体の土器が出土している。	晩期末	頭骨片数点、その他20点ほど。胸骨柄、大腿骨、脛骨骨体の一部が認められた。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
62 福島県伊達市	根古屋遺跡	第16墓坑6号棺	第16墓坑は1号土坑墓の上に當まれたもので、ほぼ円形のブランを持ち、直徑0.75m、深さ0.3mで5個体の土器が出土している。	晩期末	頭骨小片4点、その他20点余。脛骨、腓骨骨体の一部。手の中節骨。わずかだが炭化部分が見られる。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
63 福島県伊達市	根古屋遺跡	第19墓坑1号棺	第19墓坑は長楕円形を呈し、長軸1.65m、短軸1.2m、深さ0.5mで第15墓坑の形態に酷似する。なかから14個体の土器が出土しており、最終の土器が収納されていた。	晩期末	頭骨片数点、その他細片數十点。左手舟状骨。一部炭化している。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
64 福島県伊達市	根古屋遺跡	第19墓坑2号棺	第19墓坑は長楕円形を呈し、長軸1.65m、短軸1.2m、深さ0.5mで第15墓坑の形態に酷似する。なかから14個体の土器が出土しており、最終の土器が収納されていた。	晩期末	大腿骨骨体2点。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
65 福島県伊達市	根古屋遺跡	第19墓坑3号棺	第19墓坑は長楕円形を呈し、長軸1.65m、短軸1.2m、深さ0.5mで第15墓坑の形態に酷似する。なかから14個体の土器が出土しており、最終の土器が収納されていた。	晩期末	頭骨片14点、その他30余点。右側頭骨一部、前頭骨右眼窓部、下頸骨左側頭部（抜歯あり）、上腕骨、坐骨、大菱形骨、右鎖骨、脛骨骨体2点。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
66 福島県伊達市	根古屋遺跡	第19墓坑4号棺	第19墓坑は長楕円形を呈し、長軸1.65m、短軸1.2m、深さ0.5mで第15墓坑の形態に酷似する。なかから14個体の土器が出土しており、最終の土器が収納されていた。	晩期末	100余点のうち、小児の骨片20余点。左頸骨、右肩甲骨、右鎖骨、坐骨、大菱形骨、腓骨の破片。残りの骨は成人骨で、頭蓋骨錐体、鎖骨、尺骨、腕骨、膝骨、脛骨の破片。部分的に炭化している。シカの右前股第4手足骨があり、焼けで取縮しているのにもかかわらず、現生ニホンシカの最大級のものに匹敵する。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
67 福島県伊達市	根古屋遺跡	第19墓坑5号棺	第19墓坑は長楕円形を呈し、長軸1.65m、短軸1.2m、深さ0.5mで第15墓坑の形態に酷似する。なかから14個体の土器が出土しており、最終の土器が収納されていた。	晩期末	数cm以下の骨片100余点。頸骨3点。2点は成人男性のもの、1点は女性か、少年のもの。左上頸骨に抜歯が認められる。全身骨から抽出されているようである。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
68 福島県伊達市	根古屋遺跡	第20墓坑1号棺	第20墓坑は楕円形を呈し、長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.6mで、なかより4個体の土器が出土している。	晩期末	左尺骨骨体1点のみ。細いので女性であろう。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会
69 福島県伊達市	根古屋遺跡	21-1号棺	第21墓坑は長楕円形を呈し、長軸1.15m、短軸0.8m、深さ0.5mで、なかに13個体の土器が収納されていた。欠損資料も多い。	晩期末	頭骨片10点弱、その他数十点。鎖骨、橈骨、尺骨、大脛骨、脛骨などの一部、左脛骨が認められる。鎖骨、尺骨は細く、少年か、女性のもの。左脛骨は外側蹠蹠面がよく発達している。	梅宮 茂他1986「雲山根古屋遺跡の研究」雲山町教育委員会

第1表 繩文時代の出土焼人骨一覧（4）

所在地	遺跡名	遺構名	遺構所見	時期	人骨所見	引用・参考文献
70 福島県伊達市	根古屋遺跡	土器棺外	—	晩期～ 弥生	骨片の大きさは土器棺内よりやや大きい傾向、10cmを超えるものは稀。焼け方は土器棺内の骨片と同様。収縮・変形が激しく、通常の形態学的分析は困難。骨の総重量は約24kg。頸骨、頭骨骨盤、上顎骨、肩甲骨、有鈎骨、第1中手骨、膝蓋骨、脛骨、第1中足骨など。	梅宮 茂他1986「巣山根古屋遺跡の研究」巣山町教育委員会
71 福島県西会津町	塙塙岩陰遺跡	B I 区12b層	—	晩期	骨は完全に灰化しており、高温で焼かれたものである。表面には細かな褐色の亀裂が多數認めるため、歯部がいっただままで焼かれたものと推測される。上腕骨あるいは大脛骨頭蓋骨が骨幹とは離れていた。若い個体ではなきようである。年齢不明の焼人骨がすぐ近くも1例。	福島県文化センター遺跡調査会議2004「福島県文化財調査報告書296：東北断層自動車道遺跡調査会報告」福島県教育委員会
72 群馬県長野原町	石川原遺跡	18号配石墓	4号配石墓の底面石敷きの下で確認された配石墓。長径198cm、短径72cm、深さ33cmの長方形。壁石は長石を羅位置に立てて長方形に並んだ配石壁で、その上に小口積みの石を二段以上重ね、底面の全面に石敷きを施している。北西側の覆土中位から床面直上にかけ多量の焼骨破片が出土した。	後期中葉 (加賀利B3式)	ほとんどのものの白色か灰白色を呈し、輪郭に走る亀裂が見られたことから、被焼した骨格と思われる。人骨は焼化片ではなく、頭骨、体幹骨、四肢骨が確認できる。頭部がいっただままで焼かれたものと推測される。上腕骨あるいは大脛骨頭蓋骨が骨幹とは離れていた。若い個体ではなきようである。年齢不明の焼人骨がすぐ近くも1例。	公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2021「公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2021年春期調査報告書」67：石川原遺跡」公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
73 群馬県長野原町	横塙中村遺跡	30区33号住居	敷石の分布や柱穴配置、遺物の時期から2時期の住居跡が重複していると判断。33a号と33b号とした。33b号が後出で、鉄平石部の柱穴に沿って鉄平石が直線状に配されている。その附近から大量の焼骨が出土した。	後期前葉 が主生	二ホンジカイマイシの多数の「焼歟骨」に混じって出る。頭骨の頭骨及び後頭骨片。重複部位はなく、1個体。比較的の骨盤が薄く、女性である可能性があるが、部位が少く不明。後頭骨片は成人で癒合していない状態であるため、年齢は3歳代の女性1個体と推定。	財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2009「群馬県埋蔵文化財調査事業団2009年春期調査報告書46：横塙中村遺跡」財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
74 群馬県みなかみ町	深沢遺跡	20a号配石造構	大型配石遺構。平面形は隅丸方形をなし改築のため東半が広がっている。規模は長軸3.85m、短軸3.22m、深さ43cmと配石造構中最大規模を持つ。長軸方位はN-E2度。覆土上には大小の隙間で混入している。微細な破片ではあるが焼骨が覆土に多量に含まれていた。	後期中葉	亀裂や歪みの生じているものが多く、灰白色の細片になっていて、焼骨としての特徴を備えている。1592片の骨片が出土している。後頭骨、頭頂骨、蝶形骨、縫合線の見られる頭蓋骨片、歯根、腓骨、未節骨、四肢骨などが検出。同定できる部位が少ないと、1個体分の人骨に由来する。成人。性別は不明。	財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1988「群馬県埋蔵文化財調査事業団1988年春期調査報告書68：深沢遺跡」前田原遺跡」財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
75 群馬県みなかみ町	深沢遺跡	21号配石造構	石柱相配石は楕円形で、規模は長軸1.55m、短軸1.00m、深さ40cmである。配石は比較的小ぶりな河原石や山石を水平に敷き詰めている。遺物は土器細片196点、打削斧1点、石鏡1点、ビスイ製小玉2点、化粧土点、55点が出土した。また、覆土中に焼骨の細片が極少量混入している。	後期中葉	亀裂や歪みの生じているものが多く、灰白色の細片になっていて、焼骨としての特徴を備えている。9片の細片。骨の長軸方向に沿って細かくすじがみられる。年齢、性別は不明。	財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1988「群馬県埋蔵文化財調査事業団1988年春期調査報告書68：深沢遺跡・前田原遺跡」財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
76 埼玉県川口市	石神貝塚	第3号住居跡 (SJ3)	平面形は炉を中心とした4m強の隅丸方形。焼土・炭化粒子・瓦礫骨片・骨粉などとともに遺物が万遍なく分布。P2・3°意図的な理め方と思われる二ホンジカイの中足骨が出た。	後期中葉 (加賀利B2式期)	頭蓋冠の破片1点。外面に亀裂が入っていた。	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997「埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997年春期調査報告書182：石神貝塚」(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
77 埼玉県川口市	石神貝塚	SK29	不整齊円形の土壇。確認面からの深さは0.6m以上。底面は傾斜面を作りながら椭円形にしている。焼けたヒトの長骨と哺乳類の閑筋が出土。	後期中葉	長骨の破片1点。	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997「埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997年春期調査報告書182：石神貝塚」(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
78 千葉県市川市	椎原貝塚	P116	円形土坑で、長径97cm、短径96cm、深さ98cmである。焼かれた人骨細片が土坑の下層に集積されている。人為的に埋め戻された堆積状況である。	中期末 ～後期前葉	被熱を受けてひび割れし、細片化した骨片が多い。部分的に黒色を呈するものもある。肋骨、椎骨、頭蓋、手骨、足骨の破片があり、成人と考えられる。四肢の主要な長骨管の破片がほとんどなく、1個体分の焼骨としては骨片の量はきわめて少ない。	市川市掘之内土地区画整理組合設立準備委員会1987「堀之内」市川市掘之内土地区画整理組合設立準備委員会
79 千葉県大網白里市	沓掛貝塚	第98号跡	平面形は楕円形で長軸1.05m、短軸0.7mで、深さは確認面上り20cm。北西側に一部張り出しが認められる。覆土1層に骨粉がみられ、張り出し部から衛が多く出土している。	晩期	小骨片が10枚数残存。このうちの5~8枚はひび割れや灰白色の部分を持つ。これらは恐らく焼骨と思われる。縄文時代の遺跡から焼骨を見つかった例ではないが、一般的には稀であり、あるいは10世紀以降の骨が含まれている可能性も捨てきれない。	千葉県文化財センター1987「千葉県教育振興團體調査報告書12：沓掛貝塚」千葉県文化財センター
80 東京都国分寺市	恋ヶ窪遺跡	SK83土坑	第27次調査で検出。長径1.15m、短径1.05mのほぼ円形の土坑。確認面から深さ50cm。前面形状は鍋底状である。焼人骨・散骨・土器片・炭化物が出土。焼人骨は土坑底面から上部約15cmの範囲にまとまって発見。遺構内部には焼け面・焼土は認められない。焼人骨のまつ毛の中や、その他の覆土中から出土している土器片は勝坂2期式のもののが大半。	中期中葉	人骨は強い焼成を受けて変形し、大小の破片に分かれている。白色を呈し、ひび割れを示す。重量は約750g、成人個体分としてはやや少ない。頭骨の破片、椎骨片、肋骨片、右肩甲骨、右上腕骨、右舟骨骨片、左右の焼骨片、手根の月状骨片など、右上方大脚筋、左の脛骨骨片等、距骨片、中足骨片など、不完全ながら全身の各部位の骨片が認められる。年齢は熟年で、女性である可能性がかなり高いように思われる。	国分寺市遺跡調査団1996「恋ヶ窪遺跡調査報告書VII」国分寺市遺跡調査会
81 神奈川県横浜市	小丸遺跡	40号土壙	円形土坑。	後期前葉～中葉	上腕骨骨片の背表面がやや灰白色に変色しており、焼骨である可能性がある。年齢不詳成人男性1個体分。疾病、外傷などは認められない。	横浜市ふるさと歴史財團埋蔵文化財センター1999「南北一二タウン地城内埋蔵文化財調査報告書25・小丸遺跡」横浜市教育委員会
82 神奈川県横須賀市	茅山貝塚	—	不明。	—	人骨は焼き焦げのある頭蓋骨の破片と左下顎骨である。	西村正衛1915「横須賀市茅山貝塚」『日本考古學年報』1日本考古學協会、pp.54-56
83 神奈川県伊勢原市	上柏屋・秋山遺跡	6区中期堅穴住居跡	—	中期	—	小川田人2021「令和3年度发掘調査成果發表会資料」公益財團法人かながわ考古學財團
84 新潟県見附市	耳取遺跡	38T SK1304	円形土坑。	後期前葉	いずれも白色～灰黒色を呈し、表面に微細なひび割れが生じるなど焼骨の特徴を示す。脳頭蓋片、四肢骨、部位不明破片。	みつけ伝承館他2015「見附市埋蔵文化財調査報告書37：耳取遺跡」みつけ伝承館他
85 新潟県見附市	耳取遺跡	32T	—	中期後葉～後葉	いずれも白色を呈する破片で、表面に微細なひび割れが生じるなど焼骨の特徴がある。ヒトの可能性がある脳頭蓋は縫合部がみられ、内側・外側とも閉じておらず、縫合が比較的明瞭である。少年以下の可能性がある。	みつけ伝承館他2015「見附市埋蔵文化財調査報告書37：耳取遺跡」みつけ伝承館他
86 新潟県見附市	耳取遺跡	38T	—	後期前葉～後葉	いずれも白色を呈する破片で、表面に微細なひび割れが生じるなど焼骨の特徴がある。後頭骨破片、ヒトの可能かと認めた頭蓋を確認。頭骨の縫合部に内側が閉じている状態を観察し、年齢に性別は不明。	みつけ伝承館他2015「見附市埋蔵文化財調査報告書37：耳取遺跡」みつけ伝承館他
87 新潟県見附市	耳取遺跡	51T	—	晩期	いずれも白色を呈する破片で、表面に微細なひび割れが生じるなど焼骨の特徴がある。ヒトの可能性がある脳頭蓋の破片。年齢や性別は不明。	みつけ伝承館他2015「見附市埋蔵文化財調査報告書37：耳取遺跡」みつけ伝承館他
88 新潟県見附市	耳取遺跡	61T	—	後期前葉～後葉	いずれも白色を呈する破片で、表面に微細なひび割れが生じるなど焼骨の特徴がある。ヒトの後頭骨・頭骨・頸椎骨・腰椎骨・足骨など骨盤の破片。	みつけ伝承館他2015「見附市埋蔵文化財調査報告書37：耳取遺跡」みつけ伝承館他
89 新潟県村上市	元屋敷遺跡	7319土坑	—	—	頭蓋冠破片、四肢骨片が数点数枚。	朝日村教育委員会2002「朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡II（上段）」朝日村教育委員会
90 新潟県村上市	元屋敷遺跡	7250配石墓	長径118cm、短径50cm、深さ56cmの長径円形。焼骨片(378.4g、覆土全体)、土器片。検出層IVa層。	後期後葉～晚期前葉	頭蓋冠破片数点、下顎骨前歯部破片1、手または足の基節骨1が遺存する。ほか、部位不明の四肢長骨片若干。下顎骨の歯は脱落しているが、歯槽の形態から歯は削出は完了と判断。右側大脚部あるいは右側切歯部に歯槽骨が認められる。	朝日村教育委員会2002「朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡II（上段）」朝日村教育委員会
91 新潟県村上市	元屋敷遺跡	8048配石墓	長径57.5cm、短径55cm、深さ35cmの長径円形。焼骨片(57.8g、人骨以外の出土物)、土器片。鑿出層IVa層。	後期後葉～晚期前葉	頭蓋冠破片数点、下顎骨前歯部破片1、環椎1、手または足の基節骨1が遺存する。ほか、部位不明の四肢長骨片若干。下顎骨の歯は脱落しているが、歯槽の形態から歯は削出は完了と判断。右側大脚部あるいは右側切歯部に歯槽骨が認められる。	朝日村教育委員会2002「朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡II（上段）」朝日村教育委員会
92 新潟県村上市	元屋敷遺跡	8096土坑墓	残存径約40cm、深さ約40cm。人骨以外の出土物がない。トレチナによる削平のため、南半を欠く。覆土は6層に細分できるが、人骨検出は上面の1層のみ。検出層IVa層。	後期後葉以降	頭蓋冠破片数点、後頭骨下外側部(舌下神経管)1、椎骨破片1、左下不透明骨骨幹部1、指骨1。舌下神経管2分はない。	朝日村教育委員会2002「朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡II（上段）」朝日村教育委員会
93 新潟県村上市	元屋敷遺跡	8107土坑墓	8140・8143土坑墓と同一グリッド。8148を切る。略円形を呈し、長径85cm、短径75cm、深さ35cm。人骨以外の出土物がない。焼人骨の出土量が最も多く、最低でも7枚分が出土する。8102土石墓を切る。8102土石墓を切る。8102土石墓を切る。	後期後葉以降	左前頭骨頸突起が7点のため、少なくとも7体以上の骨骨盤。頭蓋骨、前頭骨、頸骨、蝶形骨、後頭骨、上顎骨、下顎骨の破片。歯槽の形態が悪くみて全て永久歯。下顎骨破片2点で右側大脚部および左のための歯槽骨片のため歯槽骨が何回かできない前歯部に、歯槽骨の閉鎖がみられる。四肢は、脛骨、足根骨、足指骨、足背骨、足舟骨、足背骨、足指骨、足背骨、足舟骨、足指骨などである。骨体は焼成している。四肢骨の骨部端はいずれも焼成している。左脛骨骨端部の一面の部の結合面の隆起は頭蓋骨ではなく、椎体の骨端部の加齢性の形成異常は頭蓋骨でない。青年から老年にかけての成人骨が主を占めているものと推測される。前筋部が発達した下顎骨は男性的、骨盆骨の柱状性の弱い大腿骨骨片は女性的であるが断定はできない。	朝日村教育委員会2002「朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡II（上段）」朝日村教育委員会

第1表 繩文時代の出土焼人骨一覧（5）

所在地	遺跡名	遺構名	遺構所見	時期	人骨所見	引用・参考文献
94 新潟県 村上市	元屋敷遺跡	8140土坑墓	8107・8143土坑墓とは同一グリッド。8143と接する。残存長は径約1mで、略円形を呈する。人骨以外の出土遺物がない。切り合ひ関係から8107土坑墓より先行する。焼人骨の出土量が少ないことから、土坑墓8107からの混入の可能性も否定しえない。	後期後葉以降	上位胸椎椎弓破片1点。	朝日村教育委員会2002『朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡II（上段）』朝日村教育委員会
95 新潟県 村上市	元屋敷遺跡	8143土坑墓	8107・8140土坑墓とは同一グリッド。8140と接する。残存長は径約60cmで、略円形を呈する。人骨以外の出土遺物がない。8140土坑墓とともに単層。人骨の出土量は少ないが、定量認められる。	後期後葉以降	頭蓋冠破片数点、左右不明脛骨骨幹部1。	朝日村教育委員会2002『朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡II（上段）』朝日村教育委員会
96 新潟県 村上市	元屋敷遺跡	25K配石	—	—	頭蓋冠破片数点、椎骨1、左右不明脛骨骨幹部1、右有頭骨1、指骨1。	朝日村教育委員会2002『朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡II（上段）』朝日村教育委員会
97 新潟県 村上市	元屋敷遺跡	遺物包含層	—	—	左側頭骨1、上頸骨歯槽突起前歯部1、下頸骨破片5、頭蓋冠破片多数、肩甲骨肩峰1、右上腕骨遠位部1、右尺骨滑車切痕1、腸骨片1、右膝蓋骨1、腓骨骨幹部1、手足の骨数点、椎骨片数点。	朝日村教育委員会2002『朝日村文化財報告書22：元屋敷遺跡II（上段）』朝日村教育委員会
98 新潟県 村上市	長剣遺跡	遺物包含層	調査区のはば中央部に当たるE23グリッドのII b層出土。	後期前葉	頭蓋骨2点。頭蓋骨の厚さや縫合状態から、どちらも成人の骨とされる。	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団2011『新潟県埋蔵文化財調査報告書224：長剣遺跡』新潟県教育委員会
99 新潟県 村上市	長剣遺跡	P6804 (SI7628)	調査区南側の6D7グリッドのP6804出土	後期前葉 (南三十 番場式)	ヒトの可能性がある四肢骨の骨幹部破片(3.63g)が出土している。骨端部が出土していないため、ヒトと断定することはできないが、ヒトの骨表面に特徴的な多孔質が観察されたため、ヒト?として記載した。	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団2011『新潟県埋蔵文化財調査報告書224：長剣遺跡』新潟県教育委員会
100 新潟県 糸魚川市	寺地遺跡	人焼骨 ピット	炉状配石内の北端に82×42cm、深さ25cmのピットがあり、灰・木炭片と多量の人焼骨と焼けた獸骨片が充填して検出された。ピット上部から長さ39cmの有茎石錐が出土し、ピット底面から朱塗土器を含む4点の土器が出土。	晚期中葉 に属する 配石遺構 中	大骨片は頭骨・体幹骨・上肢骨・下肢骨。左側頭骨の外耳大洞上端および右側頭骨の前頭突起がともに10個体分あり、少なくとも10個体以上。少なくとも1個体は未成人骨で、最少の個体数は11個体と推定。大人様変化を示す所見はない。右座骨の11骨片は切歯部が広く骨部と判定。11個体のうち10体は成人人骨。2C型が1~2個体存在。	寺田光晴・青木重孝・閔雅之1987『史跡・寺地遺跡』青海町教育委員会
101 新潟県 阿賀野市	土橋遺跡	D101	平面形は円形、断面形は不整形である。規模は長軸(50cm)、短軸(17cm)、深さ71cm。底面が焼形しており、地震の影響を受けている。覆土は単層、上位は焼骨片・炭化物粒を多量、小礫(径約2.5cm)を含む。	後期前葉 (南三十 番場式)	細片化が著しい。大きなもので5cm、大半は1cmに満たない。骨片は全て灰色から白色。右上頸骨・右頸骨・前頭骨・右側頭骨・右頸骨・右側頭骨・右頸骨・右頸骨・左頸骨で、いずれも破片化している。頭骨片には未成人、成人が確認される。年齢段階も異なる。	阿賀野市教育委員会2023『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集：土橋遺跡』阿賀野市教育委員会
102 新潟県 阿賀野市	土橋遺跡	D102	平面形は不整形、断面形は階段状である。規模は長軸(44cm)、短軸(18cm)、深さ27cm。ピットD135と重複。覆土は3層で、1層の焼土の洗浄による焼人骨を検出。土器片を多量含む。2層には焼土ブロック・炭化物を多量に含み、大小の礫がまとまって出土。	後期前葉 (南三十 番場式)	細片化が著しい。大きなもので5cm、大半は1cmに満たない。骨片は全て白色・輪郭線によって区別される。四肢骨片が存在する。右大脛骨骨幹部片が同定できた部位。	阿賀野市教育委員会2023『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集：土橋遺跡』阿賀野市教育委員会
103 新潟県 阿賀野市	土橋遺跡	C316	平面形は椭円形、断面形は階段状で、規模は(40cm)、短軸(38cm)、深さ(21cm)。底面からは焼人骨がまとめて出土。ピットC342と重複。覆土は単層・焼土などの被熱痕跡は認められない。焼人骨は土坑底面付近に被27cm、横31cm、深さ15cmの範囲にまとめて出土した。	後期前葉 (南三十 番場式)	骨は頭骨・枕幹骨・上腕・下腕骨の全身一部の重複は確認されている。一部の骨に輪郭線によって区別される。頭骨が著しく変形している。下顎左右の第3大臼歯が被削出していることから成年段階。右鎖骨の近位骨端部が融合し、2倍以上比陥の成年段階から壮年段階後半程度。外後頭隆起部が比較的の発達、乳様突起などは華奢ではなく、男性会を想起させ、総合的な判断として男性と思われる。上顎の右側頭骨は切歯・犬歯の骨槽が吸収されている。検討の結果、抜歯習俗と思われる。	阿賀野市教育委員会2023『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集：土橋遺跡』阿賀野市教育委員会
104 新潟県 阿賀野市	土橋遺跡	C区7H19 グリッド (Ⅲ b (2) 層)	—	後期	頭蓋骨片1点。白色主体で表面は青白色。長辺側に矢状縫合があり、頭頂骨の一部と思われる。	阿賀野市教育委員会2023『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集：土橋遺跡』阿賀野市教育委員会
105 新潟県 阿賀野市	ツベタ遺跡	—	1993年確認調査で検出。平面形が楕円形、断面形が袋状の土坑覆土(暗褐色沙質土)に大量の焼人骨が含まれていた。後期遺物包含層で検出。3.600±155y BP~3.560±250y BP。	後期	小片が多く完形を留めている骨はなく、亀裂や変形が認められ、700~800℃以上の温度で焼かれた而成人骨である。部位の隔たりは認められず、最小個体数は3個体で、加工痕、抜歯痕等は認められない。	阿賀野市教育委員会2023『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集：土橋遺跡』阿賀野市教育委員会
106 新潟県 佐渡市	浜田遺跡	グリッド	44-AF、44-AIのグリッドから出土。いずれも一括出土ではなく。	後期前葉 か。	いのちの骨頭骨・右頭骨・第1中指骨・大脛骨の後部の一部。いのちの骨頭骨で、細部で変形している。性別、年齢及び個体数は不明。	本間嘉晴他1975『浜田遺跡』真野町教育委員会
107 富山県 富山市	布尻遺跡	SK1348及 び周辺	長さ907m、幅0.87m、深さ0.75mの椭円形の土坑で、土器、打製石斧が出土している。骨片が多く混じっている。年代測定では後期末葉から晩期中葉頃とされている。	後期後葉以降	土坑の埋土及び遺構上部の周囲の包含層で発見され、土坑の壁面や床面に焼成土はなってない。総重量は1837gで想定可能資料は208点(624g)。同定部位はほぼ全身であるが、骨幹部(胸椎・肋骨・腰椎)や手足の骨(手根骨・中手骨・足根骨・中足骨)の数が比較的小ない傾向がある。下顎骨のオトガイ部が4個体分、右鎖骨の近位部が4個体分、後頭骨の外後頭隆起部が4個体分、右大脛骨近位部が4個体分であり、骨質の厚さや筋付骨から成人個体由来と考えて矛盾がない。乳幼児の左鎖骨がある。最小個体数は5個体で、成人男性1個体、成人人女性1個体、乳幼児1個体が含まれる。頭蓋骨の表面に齧歯目のみ跡と判断される現象が混在する。一時的に地面から露呈していた状態であった骨も含まれると推定される。	公益財團富山県文化振興財團埋蔵文化財調査課2019「布尻遺跡発掘調査報告書」富山県文化振興財團埋蔵文化財調査課2019「布尻遺跡発掘調査報告書」富山県文化振興財團埋蔵文化財調査課2019「布尻遺跡発掘調査報告書」富山県文化振興財團埋蔵文化財調査課2019「布尻遺跡発掘調査報告書」
108 富山県 魚津市	早月上野 遺跡	632号土坑	広場の西側縁辺にあたる。長径14m、短径1m、深さ0.69mがあり、重複する土坑のため、形状は不明である。広場2西側縁辺で検出した配石墓列と約1.2mの間隔で平行に並ぶ土坑列の延長にある。	後期後葉	人の頭骨3片の他に、人の可能性のある骨片3、不明骨片2片がある。	財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査課2012「富山県文化振興財團埋蔵文化財調査報告書」財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査課2012「富山県文化振興財團埋蔵文化財調査報告書」財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査課2012「富山県文化振興財團埋蔵文化財調査報告書」
109 富山県 南砺市	井戸遺跡	穴07	大形の河原石が2個置かれており、墓壙的な性格をもつ。	後・晩期	穴07出土で、人骨の可能性がある。	富山県埋蔵文化財センター1980「富山県井戸村井戸遺跡発掘調査概要」井戸村教育委員会
110 富山県 朝日町	境A 遺跡	第22号住居 跡	推定約7×6.5mの規模で、平面形は隅丸方形もしくは長円形、仰は大型の長方形石組炉。土器と石器が出土し、土製品では後期～晩期の円盤状土製品が出土している。サメ、魚、炭化物が出土。	中期中葉 ～後葉	ヒト頭	富山県埋蔵文化財センター1989「北陸自動車道遺跡調査報告書」朝日町編4 富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター1992「北陸自動車道遺跡調査報告書」朝日町編4 富山県教育委員会
111 富山県 朝日町	境A 遺跡	穴956	平面形は不整長円、規模は不明。石器2点が出土している。	後期後葉	ヒト	富山県埋蔵文化財センター1989「北陸自動車道遺跡調査報告書」朝日町編4 富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター1992「北陸自動車道遺跡調査報告書」朝日町編4 富山県教育委員会
112 富山県 朝日町	境A 遺跡	出土区81 -46	包含層	—	ヒト	富山県埋蔵文化財センター1989「北陸自動車道遺跡調査報告書」朝日町編4 富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター1992「北陸自動車道遺跡調査報告書」朝日町編7 富山県教育委員会
113 富山県 朝日町	境A 遺跡	出土区83 -63	包含層	—	ヒト頭(その他：ニホンカモシカ、ツキノワグマ、イルカ)	富山県埋蔵文化財センター1989「北陸自動車道遺跡調査報告書」朝日町編4 富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター1992「北陸自動車道遺跡調査報告書」朝日町編7 富山県教育委員会
114 富山県 朝日町	境A 遺跡	出土区84 -63	包含層	—	ヒト(その他：ニホンカモシカ)	富山県埋蔵文化財センター1989「北陸自動車道遺跡調査報告書」朝日町編4 富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター1992「北陸自動車道遺跡調査報告書」朝日町編7 富山県教育委員会

第1表 繩文時代の出土焼人骨一覧（6）

所在地	遺跡名	遺構名	遺構所見	時期	人骨所見	引用・参考文献
115 富山県朝日町	境A遺跡	出土区84-65	包含層	—	ヒト頭蓋片(その他:ニホンカモシカ)	富山県埋蔵文化財センター-1989「北陸自動車道遺跡調査報告」朝日町編/富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター-1992「北陸自動車道遺跡調査報告」朝日町編/富山県教育委員会
116 富山県朝日町	境A遺跡	出土区84-66	包含層	—	ヒト頸骨	富山県埋蔵文化財センター-1989「北陸自動車道遺跡調査報告」朝日町編/富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター-1992「北陸自動車道遺跡調査報告」朝日町編/富山県教育委員会
117 富山県朝日町	境A遺跡	出土区85-68	包含層	—	ヒト(その他:ニホンカモシカ)	富山県埋蔵文化財センター-1989「北陸自動車道遺跡調査報告」朝日町編/富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター-1992「北陸自動車道遺跡調査報告」朝日町編/富山県教育委員会
118 富山県朝日町	境A遺跡	出土区87-65	包含層	—	ヒト頭	富山県埋蔵文化財センター-1989「北陸自動車道遺跡調査報告」朝日町編/富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター-1992「北陸自動車道遺跡調査報告」朝日町編/富山県教育委員会
119 富山県朝日町	境A遺跡	出土区88-56	包含層	—	ヒト	富山県埋蔵文化財センター-1989「北陸自動車道遺跡調査報告」朝日町編/富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター-1992「北陸自動車道遺跡調査報告」朝日町編/富山県教育委員会
120 富山県朝日町	境A遺跡	出土区89-56	包含層	—	ヒト頸骨・額(その他:ツキノワグマ)	富山県埋蔵文化財センター-1989「北陸自動車道遺跡調査報告」朝日町編/富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター-1992「北陸自動車道遺跡調査報告」朝日町編/富山県教育委員会
121 富山県朝日町	境A遺跡	出土区92-47	包含層	—	ヒト頸	富山県埋蔵文化財センター-1989「北陸自動車道遺跡調査報告」朝日町編/富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター-1992「北陸自動車道遺跡調査報告」朝日町編/富山県教育委員会
122 石川県野々市市	御絆塚遺跡	4号配石遺構	3枚の長方形形状の配石遺構で約5.6×4.5mの範囲全体を遺構とした。集積が密になるまとまりの①-④が並られ、④は楕円状の配石で大きさが100×60cmである。この配石の西へ稍離して一定量の焼けた人骨を検出し、頭蓋骨、側頭骨、上顎骨、四肢骨があった。下部の土坑・ピットの関連は認められなかつた。	後期中葉から晩期末	種別は頭蓋骨、側頭骨、上顎骨、大腿骨、四肢であった。	野々市町教育委員会2003『御絆塚遺跡Ⅲ』
123 福井県永平寺町	成仏木原町遺跡	—	—	晩期後葉	遺構・遺物に伴って骨片が広い範囲から検出。大・小骨片はすべてほぼ全身骨骼の部分骨で、これらの骨片はすべて焼骨である。骨の色調は概ね白色または灰白色を呈し、骨質は硬く、その破損は锐利である。	永平寺町教育委員会1994『永平寺町埋蔵文化財調査報告書4:金合丸・成仏・木原町遺跡』永平寺町教育委員会
124 山梨県韮崎市	山影遺跡	1号土坑	長椭円形(1.4×2.1m程度)。深さ20cm前後。骨は土坑内の黒褐色土中に川原石と混入せ散在。土器片・黒曜石片が2点づつ出土。	中期初頭(五領ヶ台式)	四股骨や頭蓋骨には亀裂が多い。骨の状態から判断して比較的高温(800度前後)であると考えられる。左側頭骨の椎体が7つ出土。少なくとも7例。5-6片の幼児骨1体を含む。病的な変化としてはクリア・オルビタリヤが観察される。	韮崎市遺跡調査会1997『山影遺跡』韮崎市遺跡調査会他
125 山梨県北杜市	金生遺跡	第1号配石第2プロック	石棺状組石で内側の規模では180×100cm程の長方形の空間。焼人骨は南西壁ぎわの南壁に偏った部分にまとまって出土した。ほかに土製耳飾2点出土。	晩期前葉	1号配石の石棺状組石により一括出土。量が限られたもので一部があるにすぎない。この場所で焼かれたわけではない。頭骨は前頭骨、左右の頭頂骨。各骨は強烈な火を受けたびびれ、亀裂があり、たわむ。四肢骨は橈骨左右、亀裂、破損はある。寛骨片は坐骨、大腿骨片は後面部分のみで多変形するが、焼骨ではない。	山梨県埋蔵文化財センター-1989「金生遺跡」山梨県教育委員会
126 山梨県北杜市	川又遺跡	再葬墓	A区南部の変則ながら円形の石列遺構が検出され、東側の石組の間に再葬墓が発見された。条痕文を有する深鉢の下半部を利用したものの、深鉢内外から大量の成年男性の火葬人骨片が出土し、土器内部からは意外に石棺(櫛)と、上面より蓋にしにあらうか大きな土器片が発見された。	後期	—	須玉町史編さん委員会編1998『須玉町史・史料編』第1巻(考古・古代・中世)須玉町、pp.72-76
127 山梨県北杜市	長坂上条遺跡	—	人骨(頭蓋骨片2、脛骨片10ほかに細片)の外にわずかに炭灰と、たくさんの石塊があった。その人骨はいずれも成熟して焼いて青白骨を呈している。当時、すでに火葬があつたものか、あるいは何らかの機会に偶然に焼いたものか、はつきりわからぬが、将来研究を要するものと思われる。	後期後半から晩期	—	大山柏・竹下次作・井出佐重1941『山梨県日野春村長坂上多发掘調査報告』『史前学雑誌』第13巻第2号史前学会
128 長野県上田市	深町遺跡	SKP14	埋甕に伴う。	後・晩期	白色の骨粉状となって崩壊が進み、形を形成しない。焼骨の可燃性がある事明確でない。	依田地区埋蔵文化財発掘調査1980『深町』丸子町教育委員会
129 長野県岡谷市	梨久保遺跡	273P	平面形は円形、断面形はタライ状を呈する。口径100×95cm、底径90×85cm、深さ15cm。小石と焼土の混じった土とともに多量の人骨が出土。一体分の人骨がひとまとまりに詰まっているような状況であった。	中期中葉から後葉	もっとも多量の骨が残るものは崩壊部が多く、全體的にみて個体の入骨と認めるものであるが、各部の骨はまったく四散状態でピット内に集積された傾向をつかわせる。下顎骨は下頬に位置するなど、同じ箇所に手・足の指骨が密接し、中央辺に前腕部や脚骨など、左方に前腕部、右方に下肢部の骨などが混在し、長骨は左側に横に散在している。各骨は上下間にも密接したローリック状となっていた。後頭骨の大部は焼骨の一部、側頭骨は岩岩井型頭蓋底の一部、上腕骨の裏筋頭部、脛骨縫合部、頭蓋骨岩岩井型頭蓋底の一部、上腕骨の裏筋頭部、脛骨縫合部、頭蓋骨岩岩井型頭蓋底の一部、頭蓋骨の骨片は焼成した變形がしがい、やや原形が保たれており、歯槽も右側・大歯、小白歯などとはエナメル質を消失しから剥離して残る。脊椎骨は椎体、椎弓が壊壊する。肋骨骨片・四肢骨片すべて細片化。筋骨・脛骨等部分、上腕骨・脛骨などはわずかに存在。距骨(左)・趾骨の指骨。1個体の人骨と推定される。	梨久保遺跡調査団1986『郷土の文化財15: 梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
130 長野県岡谷市	梨久保遺跡	289P	平面形は楕円形、断面形はタライ状を呈する。口径114×(95)cm、底径96×90cm、深さ21cm。上面に人頭大以上の大きな石4枚が覆い、その下に焼土と小礫がつまり、底部付近に焼人骨がひとまとまりに出土。打製石斧片1、磨製石斧2、石皿片2、石棒片1点。	中期中葉	細片は多量。頭の際際に炭の混入、土器片、黒曜石片が嵌入している。前頭骨の前頭後部、部分合線を黒曜石片部分も含む。頭蓋骨の棘突起、肋骨片、甲骨中脚の棘突起、腰椎骨部部分などは鋭敏に識別できる。大駆骨、脛骨などの大型な骨の骨体部分が含まれている。	梨久保遺跡調査団1986『郷土の文化財15: 梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
131 長野県岡谷市	梨久保遺跡	354P	平面形は楕円形、断面形はタライ状を呈する。口径114×(90)cm、底径98×75cm、深さ37cm。焼土と炭化材が多量にあり、その下に焼けた人骨がひとまとまりになつて出土。	中期中葉	焼土・炭化材の下部に人骨が埋入。すべて極小片で、形状を残すものはない。頭蓋骨部分は火による変形が多い。頭骨骨齒部の一部や下頬部(左)の破片、頸椎の一部、肋骨・脛骨等部分、上腕骨・脛骨などはわずかに存在。距骨(左)・趾骨の指骨。龍骨の先端部が認められる。	梨久保遺跡調査団1986『郷土の文化財15: 梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
132 長野県岡谷市	梨久保遺跡	554P	平面形は楕円形、断面形はタライ状を呈する。口径110×(90)cm、底径90×85cm、深さ34cm。上面に鉄平石が据えられたようにあり、その他に焼土と炭化材と、焼けた人骨が多量に詰まっていたが、底面に密着するような出土状態であった。	中期後葉	もっとも多量の頭骨であるが頭骨は著しい。頭蓋骨部分が小片ながら数多く残る。鋸歯状の縫合線が直線状に分離する部分が認められる。上顎骨の正中口蓋縫合から離開した左側頭部と歯。下顎の骨体全部と歯。右尺骨、左腕骨の各骨体部分がいずれも取縮、弯曲をへながら厚膜を保ち、かなりきしゃいで繊維的な形狀を呈す。膝蓋骨、上腕骨、大軋骨、脛骨等の骨体の破片や凹凸部分。手骨の末節骨、中足骨の部等もある。大型の長骨骨体などが大きな破片として残存していないのが特徴。全身部分にわたる骨の存在から1個体のものとみなされる。	梨久保遺跡調査団1986『郷土の文化財15: 梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
133 長野県岡谷市	梨久保遺跡	723P	平面形は円形、断面形はタライ状を呈する。口径80×85cm、底径65×70cm、深さ16cm。石の下から形をとどめた焼骨が出土。炭化材の堆積がほとんど認められなかつた。滑石管製玉1点、石鏡1点、上面に中脚骨半分と小石多量に検出	中期中葉	密着した各骨の間に炭の混入する部分がみられる。上腕骨骨体の太さの凹凸部分と歯。前頭骨の凝固された細片のなかに骨の半周状切痕の部が認められる。	梨久保遺跡調査団1986『郷土の文化財15: 梨久保遺跡』岡谷市教育委員会

第1表 繩文時代の出土焼人骨一覧（7）

所在地	遺跡名	遺構名	遺構所見	時期	人骨所見	引用・参考文献
134 長野県 岡谷市	梨久保遺跡	342P	平面形は梢円形、断面形は桶状を呈する。口径90×79cm、底径74×60cm、深さ35cm。やや多量の焼けた人骨出土。上面より注口土器片。	後期	頭蓋を形成する板状骨(側頭骨?)が数片、長骨の破片、それらの関節部分や指骨。	梨久保遺跡調査団1986『郷土の文化財15・梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
135 長野県 飯田市	中村中平遺跡	土壤墓2	平面形は不整梢円形を呈すると思われる。規模0.85×(0.6)m、深さ30cmを測る。埋土から焼骨92g、炭が微量出土した。無文の粗製深鉢小片、土製耳白(白形耳飾)がある。	後・晚期	ヒトの頭蓋骨片、中手骨近位片、椎骨片など	飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会
136 長野県 飯田市	中村中平遺跡	土壤墓2・12	—	後・晚期	ヒトの頭蓋骨片数点(左側頭骨椎体部を含む)	飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会
137 長野県 飯田市	中村中平遺跡	土壤墓3	平面形は不整梢円形を呈し、内面が一段深くなる。規模0.95×0.7m、深さ52cmを測る。埋土から焼骨169g出土。土器片出土。	後期後半	ヒトの頭蓋骨片(左前頭骨頸骨突起部は)、椎骨片、右肩甲骨(肩甲棘)、右の腕骨近位部、肋骨片など	飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会
138 長野県 飯田市	中村中平遺跡	土壤墓6	方形柱列址1を切り、土壤墓9・10と重複。平面形は不整梢円形を呈する。規模は(1.3)×1.25m、深さ25cmを測る。焼骨37g出土。輪付の台付鉢台部がある。	後期後半	ヒトの頭蓋骨数点	飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会
139 長野県 飯田市	中村中平遺跡	土壤墓7	平面形は不整円形を呈する。規模は0.5×0.45mと小さく、深さ20cmを測る。埋土から焼骨17g出土。出土遺物なし。	詳細時期不明	ヒトの小さな頭蓋骨片、仙骨片(?)などが少量	飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会
140 長野県 飯田市	中村中平遺跡	土壤墓8	平面形は不整円形を呈する。規模0.5×0.4m、深さ25cmを測る。埋土から焼骨9g、炭1g出土。粗製無文の深鉢出土。	後・晚期	ヒトの頭蓋骨片3点、右脛骨後面栄養孔部など	飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会
141 長野県 飯田市	中村中平遺跡	土壤墓9	土壤墓6と重複する。不整梢円形を呈し、規模は0.95×(0.7)m、深さ45cmを測る。埋土から焼骨77g出土。浅鉢、羽状沈線文深鉢、粗製無文深鉢。	後期後半	ヒトの頭蓋骨片が数点、加齢変化のリッピングのある椎体(腰椎か)、相線の発達した大腿骨後面。	飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会
142 長野県 飯田市	中村中平遺跡	土壤墓12	方形柱列址1、土壤墓11と重複する。不整梢円形を呈し、規模は(1.5)×1.0m、深さ43cmを測る。埋土から38gの焼骨と微量の炭が出土。浅鉢、深鉢出土。	後期後半	ヒトの頭蓋骨片少数、椎骨片。	飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会
143 長野県 飯田市	中村中平遺跡	土壤墓13	平面形は不整円形を呈し、規模は0.95×0.9m、深さ15cmを測る。埋土から焼骨12g出土。鉢が出土。	後期後半	ヒトの四肢骨片	飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会
144 長野県 飯田市	中村中平遺跡	土壤墓14	平面形は不整形を呈する。規模は12×0.9m、深さ20cmを測る。底面は平坦ではなく、北側が高い。埋土から32gの焼骨が出土。浅鉢、深鉢がある。	後期後半	ヒトの大軽骨後面と考えられる骨片と頭蓋骨片1点、不明細片	飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会
145 長野県 飯田市	中村中平遺跡	土壤墓15	平面形は不整梢円形を呈する。規模は8.5×0.65m、深さ30cmを測る。壁は北側がやや急に立ち上がり。焼骨28g出土。深鉢出土。	後期後半	ヒトの頭蓋骨片数点	飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会
146 長野県 飯田市	中村中平遺跡	配石墓9	蓋石部分は3.3×1.6mの長方形形状に介在する。掘方は平面不整台形を呈し、規模は3.4×2.25mで蓋石部分の方向とすれ違う。深さ50cm以上、埋土は1mで焼骨の多く焼じた上、2層で多量の焼骨の入る埋土、3m、4層でわざかに焼骨がある。焼骨は2mm越前で約32,830g、容積約46,500ccを有する。炭は微量ながら5g出土。蓋石部分の下部で高さ10cmの蓋が3個体出土。内部で焼骨が入っていた。検出状況から小型壺は副葬品のとは考え難く、土器特有と考えられる。定角式磨製石斧は焼けて白色化し、細かく亀裂が走る。土器耳輪は二次焼成を受けている丸小玉はアヌイ・蛇紋岩製で、二次焼成を受けているものがある。その他、石剣・石刀・磨製石斧・石錐がある。	晩期前葉(大洞BC式並行期)	頭蓋骨の右側9個、左側8個、左右不明6個で推定最小個体数は9個体。左右不明を左右に振り分けても詳細個体数は12、配石墓の絶対量による個体数推定値(16体)よりも少ない。椎骨、數個の上腕骨片、下肢骨(後面に粗線がみられる)が出土。歯骨は合まれない。総重量32,830g。歯を含めた頭蓋骨片は2,557g。火葬骨1体分の重量からの計算では約16体分であるが、再葬墓とすると焼けられた部分が多いので、実際の埋葬個体数はさらに多いだろう。大きな破片はなく骨幹部が少なすぎるので、人為的に細片化されたとしても片寄った構成になっている。	飯田市教育委員会1994『中村中平遺跡』飯田市教育委員会、飯田市教育委員会2011『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会
147 長野県 小諸市	郷土遺跡	1335号土坑	径136×122cmの円形、深さは122cm。下部には人頭大的軽石が数点認められる。縄文土器やイノシシ骨が出土した。	中期末	下頬骨片1点のみである。萌出直前の切歯を持ち、7歳位である。	財团法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター2000『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書52・三子塚遺跡群・三田原遺跡群・岩下遺跡・石神遺跡群・郷土遺跡・東丸山遺跡・西丸山遺跡・深沢遺跡群』長野県埋蔵文化財センター
148 長野県 小諸市	七五三掛遺跡	—	洞穴。1か所目の洞穴の内壁のやや緩やかな崖面に、少し上方に向かって開口。奥行きは1か所目よりやや浅い。	後・晚期	2か所目に焼骨が含まれる。黒色に変色しているものの、変形等は認められない。	田中和彦2003『長野県七五三掛遺跡出土の縄文時代人骨』『人類学雑誌』111-1日本人類学会
149 長野県 伊那市	野口遺跡	石榔状遺構	縄文晚期の地表から60cm掘り下げた長方形土坑で、東西4.2m、南北2.5mである。内壁を枕木の大自然風を高さ50cm前後に積み上げて長方形の石榔状施設を構築している。石榔状の外壁に配石土基があり、下部に人骨片や骨壺と遺物が埋納されている。人骨群は焼けた骨片となって、2~3分体が括されている。	晩期前葉～中葉	人骨群はすべて被熱によって収縮済溝曲され細片化しているが、四肢骨や頭蓋骨の大きな破片もある。下顎骨によつて配石土基があり、下部に人骨片や骨壺と遺物が埋納されている。年齢的には老・青年各4年、壮年2年であり、抜歯の事例もある。	林 茂樹1983『野口遺跡』『長野県史考古学資料編・主要遺跡(中・南信)』長野県史刊行会
150 長野県 茅野市	御社宮司遺跡	土坑F7	平面形は不整方形土坑(60×50cm)から1体分の焼人骨が出土。推定の深さは30cm。壇内南西隅附近、底面近くに深鉢形土器の大破片が軽井に伏せられ、底面に人骨が埋葬されているが、人骨は土器の下から出土し、墓壇外にも立がつていた。墓壇内からは炭化材の小片が出土したが、焼成に用いる痕跡は認められなかった。墓壇内上部から使用痕の黒曜石の剥片が2点出土した。	晩期終末	すべて一樣に火焼を受け、骨質には亀裂、変形を生じた細片状のものがあるが、全体的には一個体分の人骨とみなされる。頭骨、椎骨、肋骨、上腕骨、脚骨、手・足骨。焼骨でありますから短小な骨の残存が量的にも多い傾向がうかがえる。	長野県中央道遺跡調査会編1982『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書茅野市その5昭和52・53年度(御社宮司遺跡)』日本道路公团古屋建設局他
151 長野県 茅野市	棚畠遺跡	第56号土壙	平面形は140×110cmの梢円形で深さ24.8cmの断面形はタライ状を呈する。土壙の中ほどに、骨片とブロック状の土壙を多量に含むかたまきを検出。特に北側の30×20cmほどの半円形の部分に骨片の集中が著しく、この部分では骨片と土壙が攪乱され、底と共に入り混じた状態。土壙には埋められた骨片が数点認められる。長さ35cmほどの角柱状の礫が1点ブロックの上に置かれていた。	中期	すべてが焼骨で細片化している。大形の破片には輪状に割れたり、亀裂や歪みを生じ、色は緑じて銀ぬず色を呈するが、一部の骨の顔面には赤色が付着し、黒色に変化した部位もある。後頭骨と後頭頸の認められるもの、ラムダ縫合が確認された辺縫合の線跡を残すものなどがいる。頭蓋底の各所の破片や歯根のものが、全般としてはごく一部で、少量であること、保存に耐える多くの部位が欠失していることから、一個体の人骨と推測しながらも、限られた一部の骨の依存結果がうかがえる。	棚畠遺跡発掘調査会1990『棚畠』茅野市教育委員会
152 長野県 千曲市	円光房遺跡	第1号配石墓址	長方形を呈する石榔状配石。長辺15m、幅4.0m、深さ3.0mである。南端に蓋石2個認められ、床には敷石が一部認められた。骨粉状の歯は齒とともに、石槽内から検出し、歯骨とされた焼骨は比較的上部の覆土から検出された。土器、石器が出土している。	後期中葉	生骨と焼骨に分けられ、生骨は人の歯のみである。焼骨は管状の長骨片などが含まれる。同じ覆土内での少量の細片はすべて白色化した焼骨。	戸倉町教育委員会1990『円光房遺跡』戸倉町
153 長野県 千曲市	円光房遺跡	第7号配石墓址	長辺21m、短辺6m、深さは推定0.3mである。石榔の側壁及び妻壁は一部のみ確認でき、敷石は整然としている。石榔と呼ぶより土壙に近く一部は西壁近くに検出された。土器や石器が出土している。	晩期後半	大小の破片がかなり多量である。人骨として確認できるのは、頭蓋骨、歯根2本、上腕骨の骨頭(左右)、尺骨、大脛骨の骨体部分、脛骨の上関節面の一部や前後を残す骨体の破片、第1中手骨である。その他の細片がすべて人骨か、歯骨と混在するのかは明確でない。	戸倉町教育委員会1990『円光房遺跡』戸倉町
154 長野県 千曲市	円光房遺跡	第9号配石墓址	第7号配石墓址の下層で検出し、掘方によって約2分の1を破壊されている。長辺20m、短辺8.0mである。石榔の側壁等は検出されず、掘方ともみられる土坑のみである。遺物群は残存敷石上面の覆土と一緒に検出された。敷石部には極めて多量の焼人骨片が集中して検出された。石器や小型の土偶が出土した。	後期	人骨はほぼ全員に亘るものであるが、遺存の状態からみて、1個体のすべての骨の集合とは考え難い。頭蓋骨は脳頭蓋を形成する板状の細片が数が多い。脊椎の横突起?、上腕骨の骨体下部や済骨部分、大脛骨の脛筋粗面部分や遠位関節部の一部、脛骨の骨体の一部、足根骨の関節面の小部分がある。シカの角の破片などが混入。	戸倉町教育委員会1990『円光房遺跡』戸倉町
155 長野県 千曲市	幡田遺跡	環状列石第2ブロック	第2ブロックでは環状下に小土壙があり、その内部から強い被熱を受けた成人の頭蓋骨片を11個検出。この場所で焼かれたものではなく、ほかで焼かれたものに土壙内に納められたとみるべきである。	中期	—	森島 稔1982『幡田遺跡』『長野県史考古資料編・主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会

第1表 繩文時代の出土焼人骨一覧（8）

所在地	遺跡名	遺構名	遺構所見	時期	人骨所見	引用・参考文献
156 長野県 東御市	辻田遺跡	SX-01	本遺構はSB-02内に造られ、礫を埋んだ状態で検出された。掘方等のプランは明確でない。SX-01の配石を除去したところ、石開炉が検出され、SB-02住居の存在が分かったため、SB-02よりも新しい。覆土の違いによって平面プランを明確にできなかった。	後期前葉以降	SX-01出土の骨はすべて一括の人骨の破砕片で分量的にも多い。これらの骨片は各区を通して幾つかの部位で接合されることから散乱状態が指摘できる。すべて焼骨で細片状となつて原形を留めていない。かなり高温の燃焼の結果、骨の表面から内部の組織まで一様に白化している。頭蓋各部は極めて細小な骨片。椎体15個。椎弓部分約10個。肋骨数本。鎖骨の胸側部や亀裂、変形によりその形状の多くは崩壊し、接合は不可能。左右2本は同一の個体と思われるが、左2本はかなり華奢である。右2本は骨体中央部での接合によりはば原形に復元される。尺骨4本。手骨。寛骨。大脛骨は接合による約13cmは片のみ。脛骨、腓骨。足骨の一部は完存するが弯曲・変形が著しい。上腕骨・桡骨・尺骨は腕骨のみのもの、左右対象のものなど形状の対比から少なくとも2個体以上の骨の混在が推測される。	東部町遺跡発掘調査団1995「辻田遺跡」上小地方事務所他
157 長野県 安曇野市	北村遺跡	SH522	配石は方形に礫を重ねた内側に長軸を東西にした環を3つ充填。平面形はほぼ円形で深鉢形土器の胴部片を埋設。掘り込み面は長径40cm、短径35cm、深さ15cm。理工大学は灰化率が多量に混在している。土器内部から灰白色化した人骨片が出土し、土器内部にまとまった焼人骨が検出された例は本遺跡では唯一である。	後期中葉(加賀利B式進行)	土器内の焼骨。全体の骨の量は多い。骨片に重複部分が多く、一体分の火葬骨。後頭部を中心にして、十分に灰化していない黒色から灰色がかった部分がある。骨盤でも後頭部にやや灰色の部分がある。この個体は仰向けに寝た状態で火葬を受けていることわかる。頭蓋骨は数cmの破片化、乳様突起は大きい、右頭の第2あるいは第3大臼歯がある。エナメル質は失われていること象牙質から判断して咬耗は進んでいた。若い個体ではない。右鎖骨の胸端部、寛骨の脛骨部がある。肩峰部に加齢変化的骨増殖がある。大脛骨の粗緻はよく発達している。若いく、高齢の男性と考えられる。仰臥位で火葬、あるいは焼死したと思われる。	財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター1993「長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14」明科町内：北村遺跡日本道路公团名古屋建設局他
158 長野県 安曇野市	北村遺跡	SK2309	—	—	焼けた頭蓋骨片が数点出土している。焼けて縮小したことを考えても骨は薄い。	財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター1993「長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14」明科町内：北村遺跡日本道路公团名古屋建設局他
159 長野県 御代田町	滝沢遺跡	30号土坑	平面形は楕円形の土坑で、推定規模は南北130cm、東西95cm。確認面からの深さは35cmで、底面は平坦。1層に細かく破碎した焼人・獸骨がまんべんなく散乱。土坑中央北よりの底面から12cmほどの位置に人頭の大顎の集積があり、II層の上に覆る。II層内から人骨の歯を検出。磚直下に滑石製ベンダントが出土。祭祀的な性格を併せ持った墓である可能性が高い。	後期前葉	出土した骨のほとんどは火は受けしており、焼かれていないのはヒトの歯、およびシカの歯など。ヒトと獣骨が混在。焼骨は細片で、四肢骨はヒトか、獣骨かは不明。火は受けているが、象牙質が残っている。頭蓋骨片6点、下頸骨片1点、歯1点出土。上頸左の第3大臼歯冠面で、咬耗はしているが、象牙質の露出はなく、比較的若い20歳前後の個体のものであろう。性別は不明。シカ38点で、イノシシは15点が出土。	御代田町教育委員会1997「御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書23：滝沢遺跡」御代田町教育委員会
160 長野県 御代田町	滝沢遺跡	Ⅲ層覆土中	D-56近くのⅢ区覆土から二ホンジカ・ヒトの焼骨が出土していることから、窟地状態の時に堆積行為・祭祀行為が行われた可能性が強い。	後期前葉以降	大脛骨骨幹中央の後面粗線部、頭蓋骨の頭蓋冠。	御代田町教育委員会1997「御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書23：滝沢遺跡」御代田町教育委員会
161 長野県 大桑村	大明神遺跡	集石群	火熱を受けた人骨はいずれも細片となっており、遺跡南半の3mの範囲から出土。耕作による擾乱を受けた地点で、埋葬当初の状態をすることは困難。石積みの群と群との間に故意にぐだかれた骨片が数枚の層になって発見された。	後期後半～晩期前半	抜根の痕跡が認められる上下頸骨13例。下頸の場合、両大歯の抜根例が大部分で、他に大歯及び切歯の全部に施された例がある。上頸では両大歯の抜根1例。	橋口昇一1967「長野県西筑摩郡大明神遺跡」『日本考古学年報』15日本考古学会、pp.113-114
162 長野県 大桑村	大明神遺跡	3号配石	約4mの範囲に約150個の石が集中。	晩期	K-8クリップ。頭骨脳室部分の板状骨片が多い。大脛骨の骨部の一部には弱度の発達を示す粗線を残す。	大桑村教育委員会1988「大明神遺跡」大桑村教育委員会
163 長野県 大桑村	大明神遺跡	2号配石	約2m四方を石で囲い、その上を覆うように平らな石を寄せていた。石囲いの周辺の数カ所から骨片が集中して出土。底面に石はない。	晩期後葉	K-9クリップ。ほぼ全身にわたる部位の骨が認められる。頭骨、脊椎骨、上腕骨、骨盤部、大腿骨、脛骨、腓骨、足骨、足指骨がある。一括骨の中には同一部位と認められる骨が5個ある。	大桑村教育委員会1988「大明神遺跡」大桑村教育委員会
164 長野県 大桑村	下条1遺跡	18号土坑	—	後期後葉～晩期前葉	ヒト右側頭骨	大桑村教育委員会2016『下条1遺跡』大桑村教育委員会
165 長野県 大桑村	下条1遺跡	骨片集中遺構	—	中期中葉～後葉	ヒト肩甲骨	大桑村教育委員会2016『下条1遺跡』大桑村教育委員会
166 長野県 木曾町	芝垣外遺跡	—	抜根例が3、4例。その理由は不明であるが、火を受けたために保存されていた骨片中から検出された。	晩期後葉	—	西沢寿晃1982「中部高地諸遺跡の抜根人骨」『中部高地の考古学II』長野県考古学会
167 長野県 木曾町	マツバリ遺跡	B-1墓坑	—	晩期初頭	頭骨の板状骨片、肋骨片、上腕骨とみられる骨部骨、長骨の細片。	日義村教育委員会1995「日義村の文化財11：マツバリ遺跡」日義村教育委員会
168 長野県 木曾町	マツバリ遺跡	B-2墓坑	—	晩期初頭	頭骨の細片。前頭骨、頭頂骨、後頭骨の部分。肋骨片、上腕骨の骨部骨部分、指骨の一部、大脛骨骨部の部分。	日義村教育委員会1995「日義村の文化財11：マツバリ遺跡」日義村教育委員会
169 長野県 木曾町	マツバリ遺跡	B-3墓坑	—	晩期初頭	頭頂骨・側頭骨の脳室部分の板状骨は湾曲・変形するが大きいものもある。側頭・頸骨の眼窓部を含む部分、上頸骨臼歯槽の一部、下頸骨骨体中葉下線と臼歯槽の一部。脊椎骨の椎体・椎弓・肋骨片、頭骨は手・足部が認められる。手根・橈骨、大脛骨の一部、膝蓋骨の骨片も残存。ほぼ全身に亘る骨と量的の傾向から個体部分とみなせる。シカの指の末節骨、トリの上腕骨もある。	日義村教育委員会1995「日義村の文化財11：マツバリ遺跡」日義村教育委員会
170 長野県 木曾町	マツバリ遺跡	10号址・10号炉址	—	晩期	頭頂骨・側頭骨の細片が比較的多く、大きい断片もある。眼窓線の一部、下頸骨骨体中央部分、脊椎骨の一部、肋骨片などが認められる。	日義村教育委員会1995「日義村の文化財11：マツバリ遺跡」日義村教育委員会
171 長野県 宋村	ひんご遺跡	SB16堅穴建物	東側から円形プランの堅穴建物跡が切り(SB16-E)、西側は、床面が三日月形に残存する(SB16-W)ため、重複と確定。(傍)矢倉式以降	中期後葉～後葉(傍)矢倉式以降	SB16から部位不明の骨片が多数出土。いずれも被熱して、人骨と思われるものをすべて採集し、50点を数える。収縮による亀裂が見られる。肉などの軟質部が付着した状態で高温に曝露された可能性がある。ヒト連体が火葬された痕跡の可能性がある。長野県では最古に近い事例。	一般財団法人 長野県埋蔵文化財センター2018「長野県埋蔵文化財センター調査報告書118：ひんご遺跡」長野県教育委員会
172 岐阜県 高山市	西田遺跡	SB2	方形の石開炉を検出し、住居址の推定は4~5m。推定プラン内の床面には数か所で焼土も検出したことから焼失住居で土器類が一括廃棄された可能性がある。	後期末葉	長骨の破片。	岐阜県文化財保護センター1997「岐阜県文化財保護センター調査報告書29：西田遺跡」岐阜県文化財保護センター
173 岐阜県 高山市	西田遺跡	SB3	約2mのほぼ方形の住居址。掘り込みは30cm。住居のほぼ中央に板状の石を配置する石開炉を検出。床面近くで角椎骨が出土地。プランが不明な当初は性格不明の土器集中区(SX2)として取り上げられている。	晩期	中手(足)骨か、指の破片。長骨破片。第2頸椎の歯突起に類似する破片。頭蓋骨状骨内板被片。右頭頂骨の乳突起付近、冠状縫合部と右側頭線の交点を含む破片、頭蓋骨状骨の小破片。冠状縫合部から頭骨の形を残す。人骨18年は最近ない事例。	岐阜県文化財保護センター1997「岐阜県文化財保護センター調査報告書29：西田遺跡」岐阜県文化財保護センター
174 岐阜県 高山市	西田遺跡	SB17	住居は5m前後の隅丸方形。南ではやや外へはみ出した形となり、仰臥西側では基底部に焼土を有する土坑があることから、住居廃絶後に上層に重複する住居が建てられた可能性がある。上層は水田耕作で削平。石開炉の対側のP1から焼骨(ヒト)がまとまって出土した。本住居からは焼骨が多く出土し、ヒト以外にも焼獸骨が多く出土している。P1付近の床面の一部に焼けた痕跡があり、焼失による廃絶もしくは意図的な廃絶と考えられる。土偶・磨製石斧・下呂石剥片・骨片が出土した。	後期中葉	長骨細片、手根または足根の関節部破片、長骨破片、上腕骨破片、尺骨か橈骨の破片、上腕骨程度の大きさがあり、新しい断面では軟質部の内部は黒みを帯びている。おそらく焼かれた時の火の大きさが悪かったのであろう。上腕骨の大結節後に類似する長骨の破片。中手骨か中足骨の破片。上腕骨か脛骨の破片。	岐阜県文化財保護センター1997「岐阜県文化財保護センター調査報告書29：西田遺跡」岐阜県文化財保護センター
175 岐阜県 高山市	西田遺跡	P389	—	不明	破損していない縫合骨。ヒトの縫合骨と推定。その他頭蓋板状の外板2片。	岐阜県文化財保護センター1997「岐阜県文化財保護センター調査報告書29：西田遺跡」岐阜県文化財保護センター
176 岐阜県 高山市	西田遺跡	SX1	—	不明	長骨・頭蓋骨破片、尺骨または橈骨の太さの破片。イノシシの白歯エナメル質破片1片ある。	岐阜県文化財保護センター1997「岐阜県文化財保護センター調査報告書29：西田遺跡」岐阜県文化財保護センター
177 岐阜県 高山市	西田遺跡	SX7	—	不明	頭蓋骨破片。	岐阜県文化財保護センター1997「岐阜県文化財保護センター調査報告書29：西田遺跡」岐阜県文化財保護センター

第1表 繩文時代の出土焼人骨一覧（9）

所在地	遺跡名	遺構名	遺構所見	時期	人骨所見	引・参考文献
178 岐阜県 高山市	西田遺跡	SX13	—	不明	長骨破片。	岐阜県文化財保護センター1997「岐阜県文化財保護センター調査報告書29・西田遺跡」岐阜県文化財保護センター
179 岐阜県 下呂市	桜洞遺跡	II第7区 Pt20	大型の穴状遺構で、形態は不整筋形田。大型礫を含む基底層を掘り込んだ。人骨片は細断化し、疊と混じる。骨片・礫片とともに火気を感知した状態が認められた。底面の北側部も火気にによる赤色化した部分が確認され、坑内での現規模で火が焚かれたことは明らかである。遺構内から石器、打石器、陶器片、土器小片が少しあ出してている。	後期?	出土人骨のすべてが小片に壊れていて、灰色になっている。骨形が非常に変形・縮小していることから、かなりの温度で加熱されたものと考えられる。年齢・性別を推定することはできない。頭蓋骨・軸椎・上腕骨・尺骨・桡骨・大脛骨・脛骨。最小個体数は7個体と推定。	萩原町教育委員会1974「飛騨・桜洞沖田」萩原町教育委員会
180 愛知県 一宮市	馬見塚遺跡	F地点5号 ピット	南約110cm、東西130cmの楕円形で、深さ70cmである。西側に多数の大粒深鉢石器小片が流れ込みて状態で出土。石器6点、黒曜石片1点のほかに焼けた人骨の小片、炭化したシイの実、木炭が少なからず検出されたが、焼けはなかった。	晚期	—	澄田正一・大參義一・岩野見司1970「馬見塚遺跡」『新編一宮市史資料編』一宮市
181 愛知県 一宮市	馬見塚遺跡	F地点7号 ピット	直径90cm、深さ30cmのピットで木炭片若干と人骨が多量に出土した。人骨は大脛骨・脛骨・肋骨等数枚以上でいずれも焼けている。土器片数枚と黒曜石片が出土した。	晚期	—	澄田正一・大參義一・岩野見司1970「馬見塚遺跡」『新編一宮市史資料編』一宮市
182 愛知県 一宮市	馬見塚遺跡	F地点3号 土器棺	口縁部を土に埋めた扁平容器を置き横に倒れた状態で出土し、土器棺を取り上げるとその下より口縁部を逸入した深鉢の大型土器片があらわれた。内部の土器は底部を欠く。地山を僅かに剥ぎ取りてそこめでその中に置かれていた。内部には小さな焼けた人骨20片があった。	晚期	—	澄田正一・大參義一・岩野見司1970「馬見塚遺跡」『新編一宮市史資料編』一宮市
183 愛知県 豊田市	木用遺跡	—	第2回調査区からは焼成痕をもつ焼入骨が小股骨やクリなど腰帯類と出土している。4区4号5区の境界部分で被熱した骨片が集中して出土し、そのほとんどが人骨である。遺構の範囲は明確でないが、複数個体の火葬骨を埋納した土坑墓であった可能性が高い。	後・晚期	骨片の総重量は約2.5kgで、シカの中手骨とイノシシの下頸骨などの獣骨の混入も認められる。頭蓋骨破片の分析から5個体(乳児1、1歳児1、成人1、複数の熟年・老年個体を含む)4以上と推定される。生前抜歯の痕跡を有する上顎骨がある。	新豊田市史編さん専門委員会2013「木用・1木森山下遺跡」新豊田市史資料編・考古1 旧石器・縄文 豊田市、pp.272-287
184 愛知県 田原市	伊川津貝塚	6号人骨群	B1区のVI層から出土した13合体葬の再葬墓。大きさは約200cm×130cmで、深さ約90cmで底部は皿状になっている。6号墓の一部を灰黒色の灰が覆っているが、VI層上面は発掘区全体をわたって、VI層上面及び下層下面には灰・焼成・焼却骨片がみられる。頭蓋骨のみがまとまっている状態ではなく、また四肢骨と頭蓋骨が連絡した状態で出土している訳でない。	後・晚期前葉	頭骨では老年に近い女性8体、熟年男性2体、幼児3体。寛骨は約11体分で女性8、男性2、幼兒1。集積墓は長軸が北東-南西向向き、約2m×1mの卵円形を呈し、基盤部を浅く掘り下げて人骨を積み上げ、南西端の一部を残して上面をうすく焼骨片混入の灰が覆っていた。No.13が焼骨。幼児。	伊川津遺跡発掘調査団1988「源氏御代の源氏御代」源氏御代調査報告書4: 伊川津遺跡 濱田市教育委員会
185 愛知県 田原市	吉胡貝塚	第173号人骨(清野43号)	—	後期・末葉	窓中に焼けた成人骨の骨片。窓は上向きで約30度傾く。(ほぼ完形で、頭部はややすぼまり骨柱とは異なる形である)。	清野謙次1969「日本貝塚の研究」岩波書店
186 愛知県 田原市	吉胡貝塚	第252号人骨(清野512号)	—	後期・末葉	窓中に焼けた成人の人の骨を容れる。窓は上向きで、わずかに傾く。底部には焼けた足骨・橈骨・脛骨の骨片を容れ(半焼け、生焼けの骨も多い)。その上に大小3個の扁平自然石を置く。この骨人は1分の女性である。	清野謙次1969「日本貝塚の研究」岩波書店
187 滋賀県 多賀町	土田遺跡	10号土器棺墓	土坑は楕円形で、長さ115cm、幅約70cm、深さ15cm。底面に接して柱體の深鉢を周縁を重ねて横位に埋設。深鉢20の体部下半の埋土下位から人骨を検出。	後期中葉～末葉	ヒトの歯のエナメル質が出土し、同定部位は大臼歯の歯咬面と側面の断面。細片も多数出土。いずれも焼かれている。	多賀町教育委員会2004「多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書14: 土田遺跡」多賀町教育委員会
188 滋賀県 多賀町	土田遺跡	11号土器棺墓	土坑は楕円形で、長さ105cm、幅約80mm、深さ25cm。底面に接して柱體の深鉢が周縁を重ねて横位に埋設。深鉢22の体部下半位近辺の埋土下位から頭蓋骨の断片と歯を検出。土器棺内理の土を精査したところ、深鉢23の埋土中から焼土、炭、動物遺体、ベンガラ、人骨が検出された。	後期中葉～末葉	深鉢22埋土下位からヒトの上顎第3大臼歯。その他の、ヒトの大臼歯の歯冠前面。深鉢23埋土下位からヒトの小白歯と大臼歯出土。出土状況から同一個体と思われる。大臼歯の咬合面の摩耗から30歳前後と推定。深鉢埋土からはシカの臼歯とサガナの骨片が出土。シカの臼歯以外はすべて焼かれていた。	多賀町教育委員会2004「多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書14: 土田遺跡」多賀町教育委員会
189 滋賀県 多賀町	土田遺跡	12号土器棺墓	土坑は楕円形で、長さ11m、幅約75mm、深さ25cm。底面に接して柱體が横位に埋設。別個体の土器片が検出されなかつたため、土器体部の下半位近辺の埋土下位から人骨を検出した。	後期中葉～末葉	ヒトの歯のエナメル質が数点破片で出土。咬頭に磨耗が見られず、若いと思われる。	多賀町教育委員会2004「多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書14: 土田遺跡」多賀町教育委員会
190 滋賀県 多賀町	土田遺跡	SK8(土坑墓)	土坑はいわば長方形で、長さ265cm、北端部幅14.2cm、中央部幅15.4cm、西端部幅15.8cm、深さ20cm。埋土の上層から人骨・土器・石器が出土。土坑の北西部、南東部、南西部の3カ所に分かれで人骨が出土。人骨は同じ土層から出土しているため、近接した時期に埋葬された可能性がある。	後期中葉～末葉	すべて焼骨で、ヒトの歯のエナメル質のみで、大臼歯。歯の摩耗の程度により推定年齢は25歳前後である。	多賀町教育委員会2004「多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書14: 土田遺跡」多賀町教育委員会
191 京都府 長岡京市	伊賀寺遺跡	火葬墓SK03	平面形は卵形で124×105cm、深さ50cmに多数の人骨片が納められている。埋土を洗浄し、約10kgを回収した。骨は薄片で、一部大きな骨を含むてようになっていた。他の火葬した後に埋め置かれたものである。土坑の10~20cmの最下層の上に埋土が甚多く、炭が多量じる層が10cm程度堆積。比較的大きめの人骨が並べられていてはこの層の上面である。さらに上面に土器片1点があり、これを埋め置く間にも必ずしも骨片が含まれていた。土器口部は口部が凹む形で、土器底が埋め込まれた。土坑内に埋め置かれた骨片が混じることから、遺骸を焼いた場所の焼土を削り取って埋め立と判断される。	後期後葉	人骨は灰白色や白色になるまで焼かれており、収縮や変形が目立つ。頭蓋骨から足の指までほぼ全身の骨を確認できる。数点の歯牙はエナメル質が脱落している。下顎骨と側頭骨の骨槽部分で9%重複している。左側頭骨の外耳道周辺部分7点、下頸骨右側の関節突起7点、下頸オトガイ部6点が6%重複しておらず、左肩甲骨間関節突起から烏鵲口突起部分の6%、上腕骨の遠位端・尺骨と骨の近位端・脛骨と骨の近位端・腓骨と骨の近位端で各1%重複している。重複している骨よりもさらに若い子供の軽椎や尺骨が残ることからもうとも10%程度の骨分である。性別を確定するに判別できる部位は確認できぬ。男女の骨が混在するようである。大多数は成人で、寛骨破片と仙骨の関節部の耳状面の形態から20歳(25~40歳)程度の人のものと判断した。頭蓋骨片の縫合線の内板部分の癒合から壯年以上の人の下頸骨の関節突起のサイズから10代後半・軸椎の左椎弓の突起突起が融合済みであることから4歳前後、尺骨の右近位関節部のサイズから1歳前後の可能性がある。	財团法人京都府埋蔵文化財調査研究センター2009「京都府遺跡調査報告集133」: 京都府遺跡調査報告集第133号 - 財团法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
192 京都府 長岡京市	伊賀寺遺跡	火葬墓SK26	火葬墓SK03の東側約8mのところ位置する。規模は405×285cm(最大)、400×400cm(中央)、深さ40cm(最大30cm)である。土器・微細な骨・炭が厚さ10~15cmの帶状に入っていた。はば平面に施す。柱頭微細な骨・炭が物が分布する。骨・焼土・炭化物のセメントとなり、5cmをなしていた。これらは微細な炭化物の散らばった状態であったが、西南部では全身の骨が30×12×12cmの中に、回転長管骨を主として東側で埋めていた。1体分の骨を小片に集めて埋めた。土器片は焼土・炭化物を置いたといのが理納の仕方であったと想定する。内部の骨や土坑の焼部が焼けていないこと、炭・骨・土器・骨の位置をなしていないこと、焼土は小さく堆積・なじみがあることから、はば火葬場をした骨・炭化物・焼土が坑内に納められたと判断した。理納は土器片と玉4点、同石質の小片約15点を回収。火葬時に着用されていた骨は不明。破損した石器4点が出土。サカナの刺の跡。	後期後葉	人骨は灰白色や白色になるまで焼かれており、収縮や変形が目立つ。頭蓋骨から足の指までほぼ全身の骨を確認できる。下顎骨と側頭骨の骨槽部分で9%重複している。左側頭骨の外耳道周辺部分7点、下頸骨右側の関節突起7点、下頸オトガイ部6点が6%重複しておらず、左肩甲骨間関節突起から烏鵲口突起部分の6%、上腕骨の遠位端・尺骨と骨の近位端・脛骨と骨の近位端・腓骨と骨の近位端で各1%重複している。重複している骨よりもさらに若い子供の軽椎や尺骨が残ることからもうとも10%程度の骨分である。性別を確定するに判別できる部位は確認できぬ。男女の骨が混在するようである。大多数は成人で、寛骨破片と仙骨の関節部の耳状面の形態から20歳(25~40歳)程度の人のものと判断した。頭蓋骨片の縫合線の内板部分の癒合から壯年以上の人の下頸骨の関節突起のサイズから10代後半・軸椎の左椎弓の突起突起が融合済みであることから4歳前後、尺骨の右近位関節部のサイズから1歳前後の可能性がある。	財团法人京都府埋蔵文化財調査研究センター2009「京都府遺跡調査報告集133」: 京都府遺跡調査報告集第133号 - 財团法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
193 京都府 長岡京市	伊賀寺遺跡	土坑SK20	火葬墓SK26と重複関係を有し、先行するもの。検出時に赤化した石片を埋むる隼大へん骨の石が集中した。出土面では炭・焼土と含まれていた。埋土ではなく、不定形の土坑の内部に石を埋めたものと判断した。埋土は土器・炭化物・焼土がわずかに認められ、4段程度の骨片が出土した。焼土・炭化物とわざかに骨片が出土したこと、埋土が2層あり、掘り返されると判断できるため、遺骸を火葬した場所そのものである可能性が指摘できる。	後期後葉以前	—	財团法人京都府埋蔵文化財調査研究センター2009「京都府遺跡調査報告集133」: 京都府遺跡調査報告集第133号 - 財团法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
194 京都府 京丹後市	平遺跡	埋甕	高さ40cm程度の深溝を正位の状態で口縁部まで埋めている。骨が付着している。脚部下部を打ち落した転用の蓋とされたもののが2点、口縁部内側から出土。長さ19.2cm、厚さ2.8cmの粗な板状石を基盤とし斜めに盛らし込む。深溝内部から被熱しらしい骨片が10点ほどは検出された。脚部下部に穿孔があり、焼成の浅溝によって塞がれていた。平面形は楕円(80×60×40cm)である。	後期	被熱らしき骨片(未鑑定)	(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター1997「京都府遺跡調査報告書79: 京都府遺跡調査報告書第73号」(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
195 大阪府 茨木市	西福井遺跡	土坑010	平面形は隅丸長方形で、長さ13cm、幅7.05cm、深さ0.24mである。埋土は褐色土で、底面はほぼ平らで、土質3cm程は骨をはさんどん含んでいなかった。下層ほど骨の残りが良く、量も多かった。骨に混じって、小さな土器片、サカナ骨片、紅顔土片岩片が出土した。骨は土坑の壁際まで乱雑に投棄されたような状態で、骨の部位をまとめたとか、人為的に並べたよう形跡が認められなかった。	後期	焼燃されたことによる骨の変形や亀裂が大きく、小片となっていた。頭骨・椎骨・肋骨・肩骨・上腕骨・下肢骨を確認した。性別はひずみや破損で不明。未出土の歯冠尖から5~10才の幼児、摩耗がある第三大臼歯の歯冠から15才以上、寛骨の耳状面は2才前後、歯骨結合面で30~40才と推定。最小個体数は成人5、未出土の歯冠を持った幼児1~6個体と推定。関節面の変形、増殖がみられる。	大阪府教育委員会2018「大阪府埋蔵文化財調査報告2017-1・西福井遺跡II」大阪府教育委員会

第1表 縄文時代の出土焼人骨一覧（10）

	所在地	遺跡名	遺構名	遺構所見	時期	人骨所見	引用・参考文献
196	大阪府和泉市	池田寺遺跡	2503-00	平面形は長円形で規模は南北約115m、東西約90m、深さは約0.7mで、底面は鍋底状である。埋土は有機質分や炭化物に富み、骨片の多くは埋土の中層である②層から出土した。底面から約30cm上部の東側壁面に自然縛が横位で出土している。	中期末～後期初頭	全ての骨片は焼かれており、焼密骨から骨髄腔に面する海面質まで灰白色を呈した。左下頸骨の一部と胸椎の2片で、ヒトと思えるものが1片出土。左下頸骨は閔節突起の下頸のみで、大きさから成人と推定。胸椎は第1胸椎から第4胸椎のひづて、育化的な状態から成年である。	大阪府教育委員会他1991『財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査報告書71：池田寺遺跡Ⅳ』大阪府教育委員会他
197	大阪府東大阪市	鬼塚遺跡	土壤墓1	平面形は楕円形で長軸150cm(推定)、短軸140cm。深さは32cm。断面形は浅い皿状を呈する。内部に成人6人、小人1人を含む8個体以上の一部焼けた骨や歯を含む人骨を検出した。人骨は個体分の下顎骨を土壤の底辺に沿って置き、その内部に長管骨を積み重ねていた。土壤中央のやや北によつた長管骨の直上に人頭大の頭縛を置いていた。焼骨の中には生焼けの頭縛や一部も含まれ、埋土より土器片10点と焼土、サヌカイトフレーク1点が出土した。土壤墓の底面には焼けた痕跡は認められず、別の場所で焼かれて移されたことは間違いない。	晩期後葉(滋賀里Ⅲb式並行)	四肢骨多数と下顎骨2個と永久歯、乳歯が出土。四肢骨の多くは土壤内北西部から出土し、ほぼ北西～東方向に向いている。四肢骨と遊離歯の一部に火を受けた痕が認められる。成人の下顎骨や20代の若性大きい女性的な下顎骨、小児の下顎骨。成人の下顎骨に比較的小さく、女性と推定。少なくとも6個体と小児1個体を含む8個体以上が埋葬されていた。残存部位が四肢骨と下顎骨に偏っていることと骨の配置から再埋葬と考えられる。	財団法人東大阪市文化財協会1997『鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書』財団法人東大阪市文化財協会
198	大阪府東大阪市	鬼塚遺跡	土壤墓2	平面形は方形で検出時の規模は110cm、70cm以上、深さ30cmである。断面形は逆台形を呈する。内部に大人2人、小人1人以上との焼骨。人骨は北東と南東の隅に頭縛を置き、その間に長管骨を積み重ねていた。埋土より土器片10点と焼土、サヌカイトフレーク1点が出土した。土壤墓の底面には焼けた痕跡は認められず、別の場所で焼かれて移されたことは間違いない。	晩期後葉(滋賀里Ⅲb式並行)	四肢骨と頭蓋骨及び歯が残存。四肢骨の多くは大きさが近いものが数本づつまとめられた。頭蓋骨は東の近くから1個と中央からやや北西による位置で1個出土。大臼歯に咬耗による象牙質の露出があり、年齢は40歳以上と推定。頭蓋骨とは別に中央やや南より位置から頭20本出土し、乳歯を含み、歯冠の形状が左側骨の頭縛間節全線の中央部。人骨は片出土し、1片は歯縛の一部とみられる。小型の補乳類の頭骨縛合部と思われる1片以外は同定できなかった。	財団法人東大阪市文化財協会1997『鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書』財団法人東大阪市文化財協会
199	大阪府阪南市	向出遺跡	土坑3	平面形は不整規円形で、規模は東西130m、南北0.95m以上、深さ0.25m。埋土の1層からサヌカイト製石核・石鏃・剥片、土器、石錐、炭化物、骨片、第2層からサヌカイト製削片、土器、炭化物が出土。出土した骨片はすべて焼成を受けしており、イノシシの左腕骨の頭縛間節全線の中央部。人骨は片出土し、1片は歯縛の一部とみられる。小型の補乳類の頭骨縛合部と思われる1片以外は同定できなかった。	後期後葉	—	阪南市教育委員会生涯学習部生涯学習推進課2009『阪南市埋蔵文化財報告43：向出遺跡発掘調査報告書』阪南市教育委員会生涯学習部生涯学習推進課
200	奈良県橿原市	橿原遺跡	東部包含層第1区D	東部包含層C区に炉址に近接して熟年男性1体を含む推定5体分で人骨には焼いたのではないと思われるものがわずかに混じっていたが、そのために炉のような施設が火葬されたものと考えるまでは至らなかった。	晩期前半～中頃	ヒトの頭蓋骨片と歯など。人骨は歯骨等の多く発見された地区の付近から出土した。歯の摩滅具合から成年段階にあるものと推定。	橿原考古学研究所 1961『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書17：橿原古墳群橿原神宮神苑施設事業による考古学遺跡の調査』奈良県教育委員会他
201	奈良県吉野町	宮瀬遺跡	配石遺構	約1平方坪の面積で周囲の所々に塊石を配して、区画をなし、そのなかに繩文土器片、石錐、石くじとともに人骨と歯骨が出土し、炭灰と雜物と堆积し、骨は塊石となって焼けていた。	—	—	末永雅雄1944『宮瀬の遺跡』奈良県
202	岡山県岡山市	彦崎貝塚	円形土坑	地表より約30cmのところの砂層に直径30cm、深さ23cmの円形土坑に頭骨2個を平坦に配した。他の部分の骨はばらばらで、それら人骨の指骨、趾骨、その他の部分の骨がばらばらに散在して埋葬され、それらが焼いた人骨である。それそれを埋葬した後にまたもう一度埋葬しなおしたのかも知れないが、特異な葬法をしているものである。	前期中葉	—	池薺須藤樹1971『岡山県久島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告書』
203	岡山県倉敷市	船倉貝塚	2号土壤墓	1号土壤墓の南50cmの位置で確認。平面形は不整規丸方形で100×90cmと思われる。残存する深さは約30cmである。ほぼ全身骨格が残っていり埋葬時の姿勢を保つものが2号人骨と呼称し、焼骨片を一括して2号人骨と呼ぶ。2号人骨は石錐2点、石鏃4点出土。	前期末以降	2号人骨とともに2号土壤墓より出土した。2号人骨は不整形の土壤墓に仰臥屈位で埋葬されていたが、26号人骨は2号人骨のほかは半屈の上に残存した。土葬より掘り込まれ、里木I式土器を伴う。26号人骨は2号人骨の埋葬時に集骨され頭部、上肢、下肢の頭骨である。下顎骨、頭蓋骨、前頭骨、側頭骨の一部、鎖骨、肩甲骨、尺骨、手根骨の一部、大脛骨、脛骨、腓骨、足根骨を確認。2号人骨とは別個体であることに相違ないが、1個体に焼骨のすべてが由来するのかは明らかではない。2b号人骨は20歳以前の成人である。	倉敷埋蔵文化財センター1999『倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告書8：船倉貝塚』倉敷埋蔵文化財センター
204	福岡県糸田町	淨土院遺跡	2号カメ棺	人骨は壇棺内及び壇棺外の南側より20片近くが出土し、中には明らかに火葬されたものを見られた。壇棺は埋葬が浅いため耕作により、口縁部は一部を残すのみで大部分は削り取られてしまっている。人骨が壇棺外より出土したことは壇棺を覆していた物質が腐食するに伴って壇棺内に土砂が流入し、内に収容されていた人骨が壇棺の南側に生じていた空隙に流出したものと思われる。	後期後半	女性成人の火葬骨。頭蓋骨、鎖骨、肩甲骨、肋骨など。	前川威洋1974「九州における縄文のカメ棺」『考古学論叢』第2号 別府大学考古学会、pp.41-45 中村修身1974「縄文時代のカメ棺墓の新例」『考古学論叢』第2号 別府大学考古学会、pp.69-72
205	長崎県雲仙市	筏遺跡	甕棺60号	口径31cm、高さ36cm、内容積約977ccの波状口縁の深鉢型土器で、底部穿孔はない。鰐類臼と骨片及び人の骨片。	後期後葉	—	諫見富士郎・内藤芳篤ほか1976『続・筏遺跡』「百人委員会埋蔵文化財報告」第6集百人委員会
206	長崎県雲仙市	筏遺跡	甕棺64号	口径32cm、高さ36cm、内容積約1138ccの深鉢型土器で、底部穿孔はない。成人口上腕骨部分その他の一部朱色に染めている。	後期後葉	—	諫見富士郎・内藤芳篤ほか1976『続・筏遺跡』「百人委員会埋蔵文化財報告」第6集百人委員会
207	熊本県熊本市	阿高貝塚	—	1919年の調査で長さ147m、幅9~12mの地帯に成人性(西側)・小兒(東側)・成人性(中央)が地下約90cmの貝塚下部から検出。男性的骨格は火の作用を受けており、小兒骨格の一部。女性骨格の大部分は火のために黒焼きとなっている。火は主として女性骨の胸部において行われ、肋骨、骨盤、脊椎骨は灰化し、大脛骨、上腕骨、前腕骨等の半ばは灰化し、残存するものも大半部分が炭化している。女性骨の頭蓋骨はわずかに燃焼している。焚火の跡は直径12~15mの範囲に広がる。	中期～後期前半(中期?)	成人女性1人、小兒1頭蓋骨、肋骨、椎骨、上腕骨、寛骨、大脛骨など。焼け残りの骨片に対する火力の働き具合から判断すると人骨焼棄は軟部組織の消失時期に行われたもので、軟部存在時期に(すなわち火葬の目的あるいは埋葬後死者に対する炎火が近くにならため)行われたものではない。軟部付着骨格を灰化するには非常に強力なる火力を要すると推察できる。	清野謙次1920『備中國浅口郡大島村津呂貝冢人骨報告』「京都帝国大学文部省考古学研究室報告」第5冊:41-42頁 京都帝國大學文學部考古學教室
208	沖縄県伊是名村	具志川島遺跡群岩立遺跡	人骨層(VI層)	第1期の岩立遺跡においては19枚の頭骨が確認され、人骨が多く量に出土した層はIV層。上、中、下の3層。中層は人骨などの遺物、下層は多量の人骨や貝製品を含む。人骨はH5.4リットル南側からH4.6リットルにかけて多く確認され、人骨の多くは集骨状況であるが、四肢骨等が同一方位に並べられた状態で確認され、ある程度の秩序をもつたことがわかる。岩立の外を中心にピーロックが確認され、墓域として区画する等の遺構が存在していたことが指摘されている。未焼人骨と焼人骨が確認され、焼人骨は西崖壁に沿って出土する傾向がある。焼人骨の周辺には場所により石灰岩や周りの岩が火を受けている部分もある。丁寧に再葬された「冨人骨」や貝輪装着人骨など特徴的な貝輪装着人骨など特徴的な葬法が確認されている。	貝塚時代前期～中期	第1期具志川島追跡群発掘調査者の岩立追跡における人骨(VI層)の推定頭骨数は62体。乾燥骨・焼骨・火葬骨があり、焼骨や火葬骨には細部と化して正確できないのが多數あったため、実際はさらに多いものと考えられる。性別と年齢では成人が61%、男性27%、女性19%、性別不明15%、未成人が39%である。焼けた人骨が37%の割合で確認された。一次葬後、遺体が廻食し白骨化した状態の人骨を再び火で焼いて再葬したと考えられる一群があり、全体の約24%を占める。焼いた場所は特定できないが、人骨を徹底的に焼くのではなく、焼け方にかなりのムラがある。例えば、1本の四肢骨でも強く焼いた場所と殆ど焼いていない場所が混在する見出される。このことは、遺体を焼いて粉々に破壊する意識というよりも「焼く」行為そのものの葬送の意味があったと思われる。皮や筋肉といった軟部組織が付着した状態で焼かれたと考えられる一群があり、全体の13%を占める。これは死後まもない遺体が喰食して白骨化する前に焼かれたと考えられ、火葬に類する葬法と言える。	沖縄県立埋蔵文化財センター2008『紀要沖縄埋蔵文化研究』沖縄県立埋蔵文化財センター
209	沖縄県伊是名村	具志川島遺跡群岩立地区	5B層崖墓	人骨が検出された範囲は約6×1mで、岩陰最奥部に沿うように長い。十数体分の人骨が検出されたが、解剖学的位置関係は保っておらず、岩陰でもさらに崖壁を意識して集骨された状態である。人骨のなかには頭蓋骨の復元が可能な保存状態の良好なものもある。	貝塚時代前期	人骨のほとんどは解剖学的位置関係を保っておらず、散乱した状態で出土した。焼骨は女性の上腕骨と脛骨が確認された。	沖縄県立埋蔵文化財センター2012『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書64：具志川島遺跡群』沖縄県立埋蔵文化財センター